

菊水町文化財調査報告 第7集

古 門 原

1985

菊水町教育委員会



菊水町文化財調査報告 第7集

古 閑 原

1 9 8 5

菊水町教育委員会

序 文

菊水町の文化財分布調査も今年度で6年目となり、主要包蔵地の広がりなど、かなり明らかになりました。今年度は、古閑原台地に広がる包蔵地の確認でした。古閑原台地は、現在、スイカ園・桑園などにほぼ一年中利用され、予定していた部分が調査できなかった所もありましたが、遺跡北限にあたる地区を調査できました。さらに、ほぼ遺跡の中心にあたると思われる所からは、多数の遺物が耕作の折に出土していたため、調査の対象に加えました。これらの結果から、本文にあります通り、従来の弥生時代を主体とする遺跡という考え方から、縄文時代～弥生時代にかけてのものという認識が得られ、古閑原遺跡は台地の全体に広がる規模の大きな遺跡ということも、今回の調査で再認識できました。まだ推定の部分もありますが、これまでの成果をもとに、今後の文化財保存に役立てていく所存です。

調査にあたりましては、地主の方々、地元の方々にご協力いただきました。茲に厚く御礼申し上げます。

昭和60年3月31日

菊水町教育長 坂 口 三 男

例　　言

1. 本書は、熊本県玉名郡菊水町における昭和59年度埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査は昭和59年5月より昭和60年3月における国庫補助事業として、菊水町教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆は池田道也が担当した。
4. 本書に使用した図の作成は、池田道也・松浦安佐子が主に行った。製図は、池田道也・中山美紀が実施した。
5. 本書の編集は、池田道也が担当した。

本文目次

一、調査区の位置と環境	1
二、調査の目的・方法・経過	1
三、調査の概要	2
1. 古閑原地区	2
〈1区〉	2
〈2区〉	3
2. 松坂原関連調査地区	6
四、結び	9

挿図目次

第1図 調査地区位置図	11
第2図 古閑原遺跡1区	12
第3図 古閑原遺跡2区	13
第4図 古閑原遺跡2区出土遺物	14
第5図 古閑原遺跡2区出土遺物	15
第6図 古閑原遺跡2区出土遺物	16
第7図 古閑原遺跡2区出土遺物	17
第8図 古閑原遺跡2区出土遺物	18
第9図 古閑原遺跡2区・1区出土遺物	19
第10図 松坂原関連調査区	20
第11図 松坂原関連調査区出土遺構図(上) 層序図(下)	21
第12図 松坂原関連調査区出土遺物	22
第13図 松坂原関連調査区出土遺物	23

写真図版 1 ~13

調査組織

調査主体 菊水町教育委員会
調査責任者 斎木 義男（前菊水町教育長）
 坂口 三男（菊水町教育長）
調査員 池田 道也（菊水町教委学芸員）
事務局 坂梨 広三（前菊水町教委事務局長）
 坂本 一（菊水町教委事務局長）
 福永 光隆（菊水町教委係長）
 堤 郁子（菊水町教委主事）
作業員 宮本 毅・池田 英臣・小林ツヨミ
 米川嘉次郎・前川 一丸・松葉 桂子
 甲斐 節子・松浦安佐子・中山 美紀
 荒牧 幸枝・田中 紀子・池田 真理
 東口 千恵・荒木 美保

— 昭和59年度文化財調査報告 (7) —

一、調査区の位置と環境

本年度は、高野古閑原台地を中心とする埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。古閑原台地は、菊水町のほぼ東北端に位置し、さらにその東北方位の眼下に菊池川が流れている。当台地は、標高約50～80mで、その広がりは、南北約1,500m、東西約500mを測り、南北に細長い形状を呈している。これまでに、弥生時代の甕棺や、縄文時代の土器・石器等が採集されており、特に台地の中心部からは、これらの遺物が、濃い密度で散乱している状況である。したがって、住居址等遺構の存在も十分に考えられた。しかし、かって大半に桑を栽培してあった時期があり、現在はスイカ畠として利用されるなど、幾度となく土地の改変がなされていることは明らかである。

台地東側の数100mに及ぶ凝灰岩の崖面には、大屋横穴群があり、現在8基の横穴が確認できる（菊水町文化財調査報告第2集長刀北原横穴群参照）。横穴群の南側には大屋熊野座神社がある。また、台地の南方に県道玉名一山鹿線が走り、県道越しの高野本村には、昭和57年度調査の際に弥生時代住居址群が発見され、焼米柳林には同年、甕棺群が発見されている（菊水町文化財調査報告第5集赤穂原参照）。

二、調査の目的・方法・経過

今年度の調査は、古閑原遺跡の正確な分布把握が主目的であった。古閑原遺跡は、古閑原台地と呼ばれる一帯に広がる大規模な遺跡で、高野・大屋・下津原東区にまたがっている。遺跡の中心部からは、過去に甕棺やその他土器・石器の類が多数発見採集されているが、台地の縁辺部にはまだ不明な部分が多かった。

台地の大部分は、現在スイカ園として利用され、ビニールハウス群が連なり、高野区側には、桑畠が多い。

調査にあたっては、目的と土地の利用状況などを考慮し、トレンチによる発掘方法を原則とした。しかし、耕作などの都合で、発掘のできない部分が多かった。結局、下調べの段階で、予定していたうちの台地北端に位置する下津原東上原に一ヶ所と、台地中央からやや南に寄った部分に一ヶ所、それぞれ1区、2区として発掘した。

1区には1.5×15mのトレンチを設定し、主に層序と遺物包含層の有無を確認した。2区については、地表に多くの遺物が散乱していたため、遺構の有無を確認する目的で5×5mの

グリッドを2区画設定し、さらに拡張区を設けた。

今年度は関連調査として、松坂原遺跡を選定しグリッドを1区画だけ設定した。同遺跡の調査は今回で三度目である。

調査経過概略は次の通りである。

5月～6月 発掘地区選定のための予備調査。

7月末～8月 過去に出土した遺物の整理。

11月12日～30日 古閑原遺跡1区・2区の調査。同時に出土品整理。

12月10日～26日 古閑原遺跡2区の調査。同時に出土品整理。

1月16日～25日 松坂原関連調査地区の調査。同時に出土品整理。

2月3日～24日 出土品整理。

3月10日～31日 出土品整理。

三、調査概要

1. 古閑原地区（第1図参照）

〈1区〉（第2図参照）

同区は下津原東上原に位置し、すぐ近くから上原箱式石棺が出土している。発掘前の所見では、弥生時代を中心として、縄文時代あるいは古墳時代中世～近世の幅広い時代の遺構を予想していた。1.5×15.4mのトレンチをひとつ設定開掘した。

◎層序（第2図参照）

I層～V層に分けられる。

I層……耕作土。キメの細かい土で黒褐色を呈す。（この地点では遺物を含まないが、他の地点では、耕作土層にかなり遺物を含んでいる所がある。）

II層……黒褐色で色調は耕作土層に酷似するがI層に比べ硬い層となっている。遺物（搅乱）を少量含む。

III層……混茶褐色斑黒褐色土層。縄文時代の後期～晩期の遺物を含む。

IV層……茶褐色土層でわずかに粘性があり、軟らかい。無遺物層。

V層……茶褐色のローム層で無遺物層。

III層の土器は研磨土器に属するもので、他に粗製土器の破片も見られる。いずれも少量である。

◎遺構（第2図参照）

8個のピットを検出した。住居址に伴うものと考えられるが、8個のうち、トレンチのなかほどに検出した、径1mほどのピット2個は、他と若干相違点が見られた。輪郭はきわめて

明瞭で、内部の土は軟性茶褐色を呈し、どの層にも見られないものである。他の6個のピットについては遺物から考えても、縄文後晩期のものと考えられる。それぞれのピットの深さは25~35cmである。何らかの遺構があることは、間違いないところだが、その種類性格までは、現段階では言明できない。機会をあらためて調査を実施したい。

◎遺物（第9図参照）

遺物は、土器5点、石器2点で、いずれも第3層中より出土したものである。量的には、少ないが、遺構の存在を裏づけるものである。

○土器（第9図113~117）

113~115は口縁部である。113は黒色研磨土器に属するもので、推定器形は浅鉢である。外反する短かい頸部から、やや内側に「く」の字形に屈曲する口縁を持つ。口唇部下に、一条の沈線が施してある。黒褐色を呈し、内外面には、暗文が著しい。114はいわゆる粗製の鉢で黒褐色を呈する。いくぶん、胴の張る器形となろう。口縁は、ごくわずかに内傾する。115も114とほぼ同様の器形となろう。口縁は、ごくわずかに内傾する。胎土に砂粒が目立つ。焼成は良い。内側に横位の浅い条痕が認められる。暗褐色を呈し、114と比べるとややもろい。胎土に砂粒が目立つ。116は晩期に多い条痕文土器の胴部である。茶褐色を呈し、焼成が良く、かたい。117は底部である。赤褐色を呈し、平底あるいは、なかほどがわずかにくぼむ器形となろう。胎土に多くの砂粒を含む。

○石器（第9図118~119）

いずれも、黒曜石製である。119は石鎌で装着部の抉りが深く一方を欠失している。いくぶん雑な作りである。118は旧石器に見られるいわゆる有舌剣片尖頭器の形状に近い。しかし旧石器のような古さは感じられず、出土の状況からも、縄文晩期初頭の時期の遺物である。作りは、稚拙であるいは未完成品かもしれない。

〈2区〉（第3図参照）

同区は古閑原遺跡のほぼ中心部に相当する部分である。はじめは予定に入れていなかった所であるが、桑の植え替えのため、かなりの深さまで、攪乱をうけており、多数の遺物が散乱していた。このため遺物包含層の遺存度と遺構の存在を明らかにするため実施した。5×5mのグリッド2面と第2グリッドの北側に拡張区を設け、開掘した。

◎層序（第3図参照）

I層~IV層に分けられる。

I層……混砂黒褐色土層。耕作土層でもあり、著しい攪乱をうけている。縄文時代以降のさまざまな遺物が混入している。

II層……暗褐色土層で、攪乱をうけている。縄文式土器~須恵器片を含む。

III層……褐色土層。攪乱をうけている所もあるが、縄文時代の遺物を包藏する。

IV層……粘質茶褐色土層。無遺物層。

◎遺構

明確な遺構は認められなかった。次項に述べる遺物の量から考えても、何らかの遺構が検出されて当然なのであるが、攪乱が著しく、しかも、長年にわたり幾度も幾度も、攪乱をこうむった形跡がある。加えて遺物包含層も浅く、今回の調査では以上のような結果となった。昔から遺物が採集されている地点は、遺物包含層が浅く、一様に攪乱も著しいと推定される。

◎遺物（第4図～9図参照）

○土器（第4図～第7図）

ほとんどが縄文後、晩期にかけてのもので、形式名で言えば、三万田式、御領式、黒川式などの系統に属するものである。1は口縁に二本の平行沈線文が描かれ、外反する頸部からほぼ直立気味に口縁が続き、砂粒を多く含む。2は肥厚気味の幅広い口縁部が直立し、三本の平行沈線を描いてある。胎土焼成良好である。3・4・6・7は外反する頸部に直立かやや内傾気味の口縁部をもつもので二本の平行沈線を有する。7は内外に暗文が認められ、いずれも胎土・焼成は良好である。5は、やや丸味のある幅の狭い口縁部が直立し、頸部は外反する。8は、外反する頸部から直立する口縁部へと続き、口唇は丸味を帯び外反している。暗文を有し、仕上げが入念である。9・11は、ともに胎土・焼成良好で暗文が認められる。特に9は器壁も薄く仕上げが入念である。ともに浅鉢の器形となろう。10・12・13・17は、深鉢形となるもので、13を除き胎土・焼成はかなり良い。いずれも口縁部には一～二本の平行沈線が認められる。14～16は、口縁部に文様帶がなく、いわゆる無文の粗製土器に類するものである。焼成は良い。18は「く」の字形に屈曲する胴部から短い外反する頸部に続き、丸味を帯びた口唇部が特徴的である。浅鉢に近い器形となろう。19・20・25は無文でいずれも胎土に砂粒を多く含む。21・22・23・24は仕上げが入念で内外に暗文が認められる。26は、直立する口縁が波状になる部分で、器壁が薄く胎土・焼成は良好である。27・29・31・33は無文土器で、胎土に多く砂粒を含んでいるが焼成はいずれも良い。28・30・35は、幅の狭い口縁部に一本の沈線を有し、やや内傾気味に立ち上がっている。胎土・焼成は良く、内外に暗文が認められる。32・34は、広めの口縁文様帶を有し、口唇部は波状をなす。36・38・40は、短い屈曲する頸部を持ち、外傾する口縁へと続いている。無文である。41も無文であるが、頸部はくびれが少く、口縁部は直立し、口唇部がわずかに外反気味である。43は大きく外反する頸部から短い内傾気味の口縁部を持ち、内外に暗文が認められる。44は、外反する頸部に、やや内傾気味の口縁部を持ち、口縁部には、三本の平行沈線が描いてある。頸部に暗文が認められる。45は、無文であるが、大きく外反しつつ屈曲する頸部に、内傾気味の口縁部が続く。46は、いわゆる黒色研磨を施した浅鉢形土器で、口縁部は外反している。仕上

げは入念である。47・48は、ともにほぼ直立する口縁部をもち、内外に研磨痕が認められる。49は、頸部のくびれの著しい器形である。口縁部は、ほぼ直立し、口唇断面は三角形状である。50・51・52・53・54・55・57・58・60は、いずれも直立するか、やや内傾する口縁部を持つもので平行沈線を施してある。56は、浅鉢状になるものと思われ、大きく外反する胴部から、短い丸味を帯びた口縁部が続く。59は、磨消繩文を施したもので、大きく外反する頸部に狭い口縁部が続き、文様はその口縁に限られている。口唇部断面形は、三角状を呈し、波状の（山形の）口縁である。61・62・63・64・65・66は、いずれも黒色研磨を施したもので、器壁は薄い。器形は、浅鉢形となろう。大きく外反する胴部から「く」の字形に屈曲しつつ、短い口縁部に続いている。口唇部は丸味を帯びている。67は無文で、口縁は外傾する。68は、内傾する口縁部に、浅い沈線が認められる。69は、外傾する口縁部の外面に条痕が認められる。焼成は良い。70・71・72・73・74・75は無文である。70・71の外面には、ヘラによる整形痕が認められ、72は内湾する口縁部を持ち、74は、波状口縁をなし、浅鉢形の器形となろう。77は、全体的に器壁が厚く、外反する頸部に直立する口縁が続いている。口縁部には、太めの平行沈線が描かれている。胎土に砂粒が目立ち焼成は良好である。79は、浅鉢形土器の「く」の字形に屈曲する胴部である。黒色研磨が施してあり、仕上げは入念である。80は、2本の平行凹線文に磨消繩文の施してある胴部である。81は頸部から口縁部に続く部分で、外反する頸部に直立する口縁部が続いている。胎土・焼成は良い。82・83・84・85・86・87・88・89・90・91はいずれも底部である。全体的な特徴として上げ底が多く、平底となるのは、85・87の2点である。91は、脚台の底部で、表面に浅い条痕が見られる。

○石器（第8図～第9図）

石器は、打製石斧を主に全部で21点出土した。92は、最大長11.4cm、最大幅5.2cmを計り、柄を装着するための抉りが見られる。93は、最大長11.3cm、最大幅6.3cmを計り、上端の幅が狭くなり、わずかな抉りが認められる。94は、最大長7.9cm、最大幅5.3cmで、中ほどから刃部にかけて、きわめて薄く剥離しており鋭利である。95は、最大長10.4cm、最大幅5.2cmを計り、刃部は鋭利に剥離している。92・93・94・95は、いずれも打製石斧である。96は、円形石器である。三分の一ほどを欠失しており、復元推定径は約7.5cmである。97は、最大長11.5cm、最大幅6.9cmの打製石斧である。刃部の整形は粗雑である。98は、局部磨製の石斧である。刃部だけを磨滅させ整形している。復元最大長は、9.7cm、復元最大幅は、4.5cmを計る。刃部の大半を欠失している。99は、刃器である。一端を欠失しており、残存の刃部長は、7.0cm、最大幅4.1cmを計る。100は、石錐である。ほぼ橢円形の素材を用い、長径の両端を打ち欠き、抉りを入れている。径6.2cm×4.7cmを計る。101は、局部磨製の石斧である。刃部を研ぎ出すことで鋭利に整形している。最大長8.7cm、最大幅6.7cmを計る。102は、打製石斧である。頭部を欠き、最大長5.4cm、最大幅8.1cmを計る。103は、磨製石斧である。刃部は両面から均等

に研ぎ上げ、両側端には柄を装着するための抉りを設けている。最大長9.3cm、抉り部幅5.7cm、最大幅7.0cm、最大厚4.0cmを計る。104は、103と同様磨製石斧である。103よりも、かなり細身である。中ほどに抉りが見られ、刃部は両面からほぼ均等に研ぎ上げてあるが、その約二分の一ほどを欠失している。最大長11.9cm、最大幅は4.6cmを計る。105は、打製石斧である。出土した打製石斧の中では、やや肉厚で、刃部もそれほど鋭利ではない。最大長8.7cm、最大幅6.2cmを計る。106は、磨製石斧である。全体を入念に研磨しており、刃部は片面の研磨が著しく、いわゆる片刃の磨製石斧である。刃部の一端をわずかに欠失している。最大長7.1cm、刃部長4.9cm、最大幅4.9cmを計る。107は、打製石斧で刃部の一端を欠失している。刃部は部分的な研磨が認められる。最大長13.4cm、最大幅5.7cmを計る。108は、打製石斧で、刃部の一部に研磨された痕跡が認められる。最大長14.5cm、最大幅6.2cmを計り、出土した打製石斧の中では最大である。109は、やや肉厚の円形石器である。8.8cm×10cmを計る。110は、磨石である。片面は人為的に平らによく磨滅されているが、もう片面のほうは自然に磨耗したままの状態を保っている。そのため、全体的に丸まった観があり、横断面形は橢円形に近い。大きさは13.2cm×9.1cm、厚さ7.1cmを計る。111は磨石で、110に比べて、角ばった形状である。上下左右の四面とも平らに磨滅されている。部分的に抉られたようなくぼみが認められる。横断面形は四角形を呈している。大きさは、12.8cm×7.5cm、厚さ5.4cmを計る。112も磨石である。残存部から、その約三分の二ほどを欠失しているものと思われる。片面の研磨は、ひじょうに著しい。

〈まとめ・古閑原地区〉

広大な古閑原台地からは、従来よりさまざまな表採遺物が見られた。小規模な基盤整備のたびに、何らかの遺物が出土し、できるだけ早く基本的な調査が必要な地区であった。これまでに採集されていた遺物から考えると、弥生時代を主とする遺跡と考えられていたが、前述したように、本年度の調査で明らかになった遺物は、縄文時代の後～晩期のものばかりであった。事情が許せば、もっと数多くの箇所を開掘したかったが、現地一帯は非常に優れた畠地となっているため、実際に開掘できたのは、2ヶ所だけであったことが残念である。しかし、当遺跡の北端にあたる下津原東上原地区カンパルを調査できたことは幸運であった。地主の方々の厚意に改めて感謝したい。

2. 松坂原関連調査地区（第10図参照）

同区は、今回で三度目の関連調査になる。これまでの調査では、多数の縄文式土器や土師器壺などが出土している。また県教委の調査では近くの姫塚古墳より複合口縁の土師器壺も出土している。県道玉名一山鹿線を隔てた清原台地には、国指定史跡の江田船山古墳・虚空

藏塚古墳・塚坊主古墳などがあるほか、来年度早々には、県立「風土記の丘」公園の一部である石人の丘が完成する。このほか、松坂原遺跡の周囲には、長力・北原横穴群や松坂横穴群（菊水町文化財調査報告書第2集参照）があり、文化財の密集地となっている。今回は、古閑原遺跡から出土した土器が、松坂原遺跡のものと同時代という関連もあり、調査することになったものである。

現地は畠地であるため、調査の可能な部分に6.4m×3.4mのグリッドを設定開掘した。

◎層序（第11図参照）

I層～V層にわけられる。

I層……耕作土層。褐色を呈し、各時期の土器細片を含む。

II層……混砂褐色土層。攪乱をうけている。各時期の土器細片を含む。

III層……黒褐色土層。縄文式土器を多く含む。明確な遺物包含層である。

IV層……茶褐色土層。上部にわずかに縄文式土器を含む。

V層……茶褐色土層。色調はIV層と同じだが硬い。遺物なし。

◎遺構（第11図）

遺構は、幅およそ2m弱、深さおよそ20cmの溝状のものと、ピット群を検出した。溝状遺構は、検出範囲が狭いため、断定はできないが、円形（あるいは楕円形）か矩形に周る可能性がある。年代は、検出した層位と出土遺物から考えると縄文後期～晩期のものと言える。前回の調査では、古墳時代の遺物が検出されており、仮に方形周溝墓とすれば、附近の古墳群などとの年代の推移を考える上で非常に興味深い。本来、県道玉名一山鹿線を隔てた清原台地とこの松坂原台地は一連のものであり、両者は常に関連して考えられるべきものである。県道玉名一山鹿線の工事中には、多数の土器が出土していると聞いている。

◎遺物（第12図～第13図）

○土器（第12図～第13図）

多数の土器が出土した。古閑原遺跡の遺物とほぼ同時期のものばかりであった。

120は口縁部である。外反する頸部に続く口縁部で、やや外傾して立ち上がっている。文様帶の幅は広く、5本の平行沈線が描かれている。白っぽい淡黄色を呈し、焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。口唇部は丸味を帯びている。121は、口縁部の立ち上がりが内傾気味であるが、文様帶の幅、文様、胎土、焼成など120にきわめて近い。122は、頸部から口縁部に続く部分に特徴が見られ、ゆるやかに内傾しつつ延びる頸部の先端から、急に外へ短く屈曲し、そこからほぼ垂直に口縁文様帶が立ち上がっている。口唇部は、丸味を帯びている。文様帶は幅広く、文様は浅く粗雑で、沈線というより条痕といったほうが近い。123は、出土した土器のうち最も大きな破片で、外反する頸部に、幅広い口縁文様帶が続く。口縁部はやや内傾する。文様は121に近い。淡黄色を呈し、胎土、焼成は良い。124は、無文の口縁部である。

胎土にやや大きめの砂粒を含むが、焼成は良く硬い。125は、黒色研磨土器で胎土・焼成ともに良好である。くびれつつ大きく外反する頸部に、ほぼ垂直に短い口縁部が続いている。口唇部は丸味を帯びている。内外に暗文が著しい。126は、全体的に125と形態は似ているが、断面形がやや直線的である。頸部のくびれ具合も、角ばった観がある。これも黒色研磨土器で、胎土・焼成良好である。内外に暗文が著しい。127は黒色研磨土器で、胎土・焼成も良く、薄手の精緻な仕上がりである。外反しつつ延びる頸部に、短い丸味のある口縁部が続いている。一本の細い沈線が描いてある。128は、浅鉢の頸部から口縁部にいたる部分の小片である。薄い作りで、短い頸部に丸味のある短い口縁部が続いている。胴部から頸部へ続く部分は「く」の字形に屈曲している。129は、大きく外反する頸部に短い口縁部が続いている。130は小片であるが、やはり黒色研磨土器に類するもので、胎土・焼成は良い。131は、外反する頸部に短い口縁部が続いている。表面には横位のナデが認められるが荒い。132は、胴部が直線的に外傾しつつ立上り、そこから短い口縁部が続いている。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好である。133は、外反する頸部に口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口唇部近くでやや内反する。二本の沈線が認められる。胎土に砂粒を含むが、焼成は良い。134は無文土器の口縁部である。器壁は厚く、外傾する胴部に、やや内反する口縁部が続いている。焼成は良い。135は、内反する口縁部に粗雑な沈線文が描かれている。胎土には砂粒が目立つが、焼成はきわめて良好である。136は、外反する頸部に、ほぼ垂直の口縁部が続いている。口縁文様帶には、3本の沈線が描かれ、口唇部は丸味を帯びている。137は、口縁部であるが、口唇部を欠いている。三本の深い沈線が描かれている。焼成は良好である。138は口縁部のみで、頸部からの続き具合は不明であるが、やや内傾するものと思われる。139は、外反する頸部に、やや内傾気味の口縁部が続いている。三本の沈線が描かれ、焼成は良好である。140は、口縁部のみで頸部との続き具合が不明であるが、ほぼ垂直に立ち上がるものと思われる。描かれている四本の沈線は、細く浅く等間隔である。141は無文土器の口縁部である。口縁断面形は、三角形状を呈している。胎土・焼成は良好である。やや外反している。142は、外反する頸部に口縁部が続くが、その先端の口唇部を欠いている。口縁文様帶には二本の沈線が描かれている。143は、胴部で「く」の字形に屈曲している。屈曲部のすぐ上には条痕が著しい。貝殻による条痕と思われる。144は、沈線文の描かれた胴部である。沈線は鋭利で明瞭に描かれている。胎土・焼成は良好である。145は、研磨土器の胴部である。「く」の字形に屈曲している。146も研磨土器の胴部である。ヘラ状施文具による暗文が認められる。胴部の屈曲は、145のそれよりも鈍い。147は、磨消縄文に類するもので、沈線というよりも凹線に近い文様と、貝殻擬似縄文との組合せである。次に底部である。多数出土したが、ここでは、148と149の2点をとりあげた。148は平底で、深鉢形の土器に伴うものと思われる。胎土・焼成は良好である。149は、わずかに上げ底となっている。径9.2cmを計る。これも深鉢形の土器に伴うものと思われ

る。以上が松坂原遺跡出土の土器群であるが、古い形式のものが147の磨消繩文をもつものである。さらに、弥生・土師・須恵器の小片も出土している。また今回は、須恵器壙(159)が出土した。完形品で底部に墨書きがある。不鮮明で判読できないが遺跡の性格を考える上で、きわめて遺重である。

○石器 (第13図)

150は刃器である。刃部は研磨によって形成されている。刃部長は4.4cm、最大幅3.7cm、最大長7.1cm、厚さ約0.5cmを計る。151・152・153は石鎌である。いずれも黒曜石製である。151は、一方の脚を欠失している。脚部の抉り込みは深い。152は、両方の脚部先端を欠失している。しかし、残部から脚部の抉りは浅いと推定される。横断面形は、高さの底い均整のとれた二角形状を呈している。153は、三点の石鎌中最も精緻な作りである。脚部の先端に特徴があり、断面形も均整がとれている。154は、刃部だけに研磨を施した局部磨製の石斧である。刃部は鋭利に研磨されており、刃部幅は6.6cmである。最大長12.6cm、最大幅6.7cmを計る。155は先細りの局部磨製石斧で、研磨箇所は先端のごく一部に限られている。156は、やや小さめの磨石の一部と考えられる。残部長5.6cm、幅5.6cm、厚さが3.6cmである。157はサヌカイト製のスクレーパーである。158もサヌカイト製で、柄を装着するための抉り込みがある。刃部は片側だけにしかなく、用途としては、ナイフかスクレーパーが考えられる。最大長6.6cm、最大幅3.9cm、抉り部幅2.9cmを計る。

○まとめ (松坂原関連調査地区)

松坂原遺跡の調査は、今年で四度目である。最初は、工場誘地のための調査で、調査規模も最大であった。このとき、多数の繩文式土器とそれに伴う遺構が検出された。この調査で、松坂原遺跡の年代が繩文後晩期のものとほぼ位置づけられた。量的には、やはりこの時期の遺物が多いが、古墳時代の遺物もかなり出土しており、近くには姫塚古墳(消滅)もある。さらに、今回検出した遺構も、完掘できたわけではなく、今後の課題となる点がまだ多い。

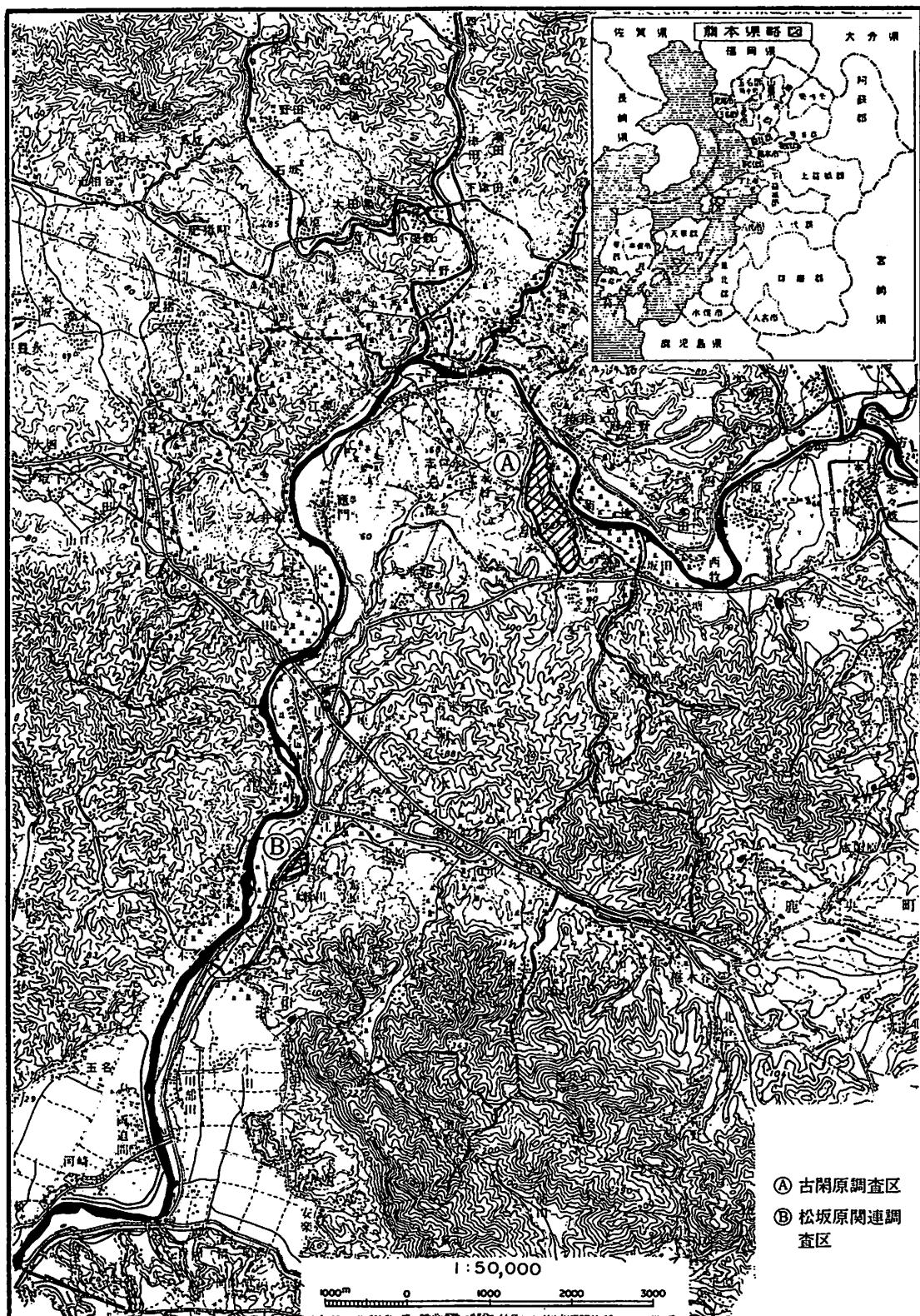
四、結び

今年度の調査は、古閑原台地の遺跡の範囲を確認することが主目的であった。従来の採集遺物から考えて、はじめの予想では、弥生時代を中心に形成された遺跡と考えていた。しかし、結果的には、出土遺物そのものは、繩文時代のものばかりであった。調査区の設定にも原因があると思われるが、古閑原遺跡の性格を考える上で、これまでの弥生時代中心から、繩文時代後期～弥生時代と年代の範囲を広げる必要がある。古閑原台地の中で、各年代による遺跡の偏在、つまり年代ごとに小単位で遺跡の推移を捉えていく必要がある。広大な台地の中での、細かな遺跡の年代の推移を、今回の調査である程まで知ることができたが、明確

な遺構の検出が不十分だった。その原因のひとつに、遺物包含層が浅く、耕作などにより、かなりの部分が攪乱をうけていることがあげられる。特に遺跡の中心部に著しく、早い時期に再調査の機会を持ちたいと考える。

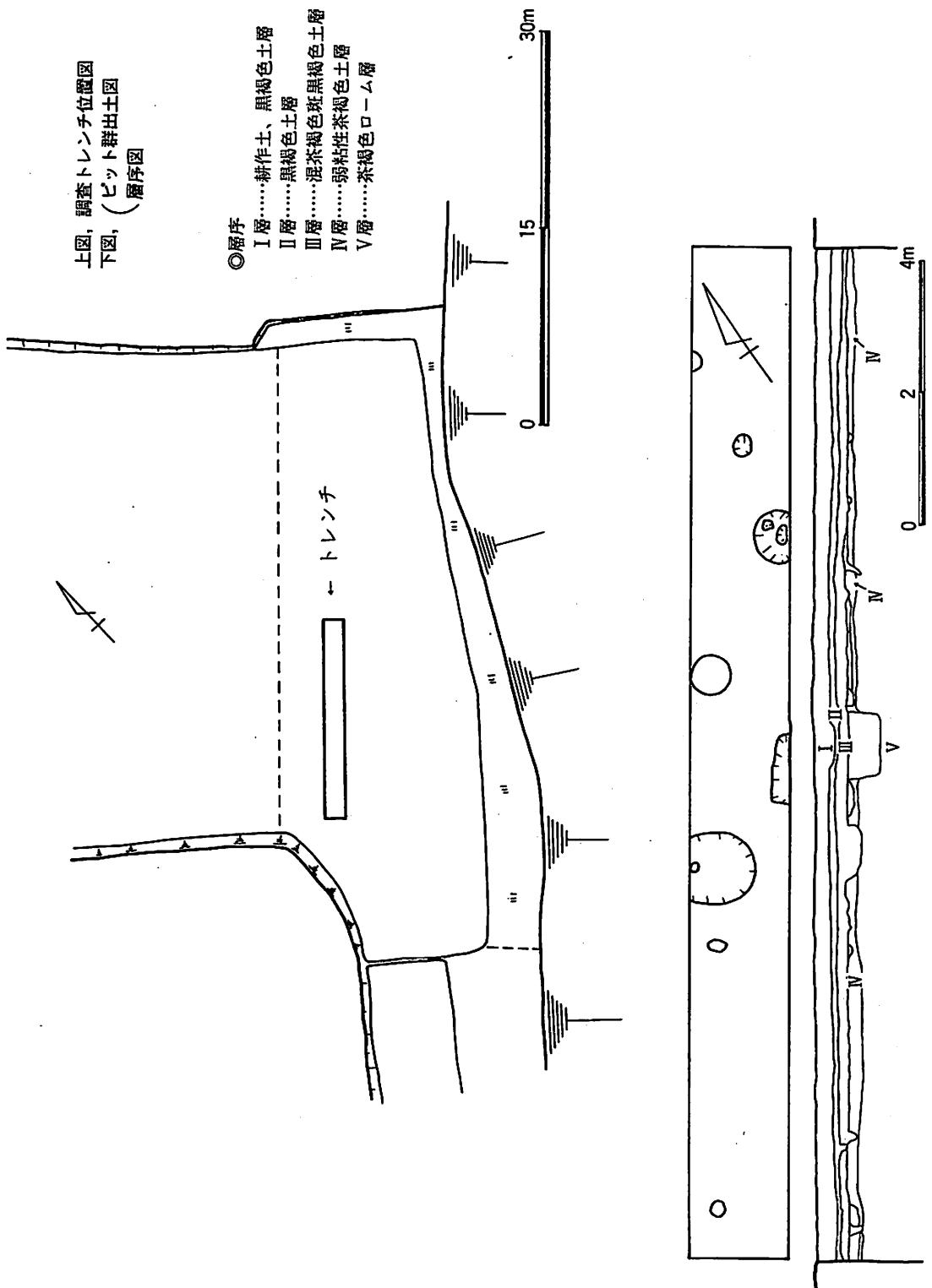
関連調査区として松坂原遺跡を選定したが、遺物の量も多く、遺構も検出した。遺構は耕作の都合で、全体を検出した訳ではないが、前述の通り、時期は縄文後晩期のものと考えられる。県道玉名一山鹿線を隔てた清原台地は、江田船山古墳等が有名であるため、縄文後期以降の良好な包蔵地であることを看過しやすい。しかし、松坂原遺跡と包蔵地としての清原遺跡は本来一連のものと考えなければならない。さらに、清原台地から北へ250mの地点には、縄文時代中期後葉に形成された若園貝塚がある。この三つの遺跡は、出土遺物により、若園貝塚→清原遺跡→松坂原遺跡の順に新しくなる。この隣接する三遺跡の推移は興味い。若園貝塚と清原遺跡は、県立「風土記の丘」の指定区域であるため保護の面では心配ないと思われるが、松坂原遺跡のほうは、毎年民家が増加している。まだ、かなりの遺存度を保っているので、今後も機会を見て調査を続行する必要があろう。

（了）

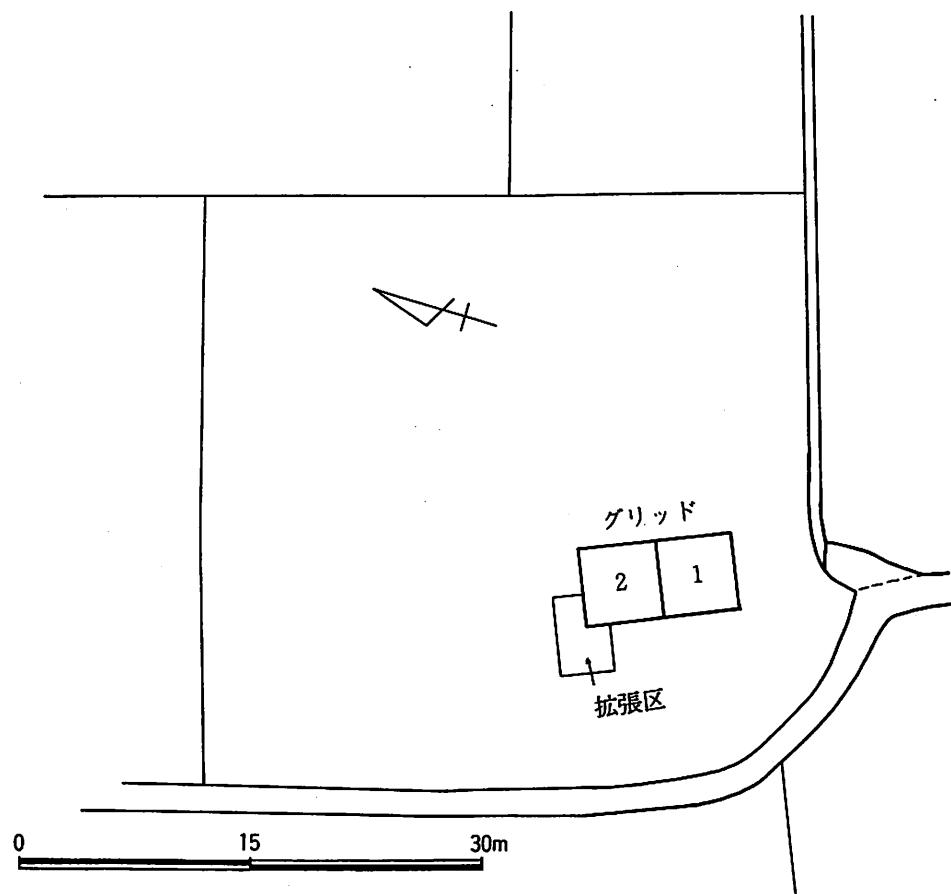


(第1図 調査地区位置図)

上図、調査トレンチ位置図
下図、(ヒット群出土図
(層序図)



(第2図 古闕原遺跡1区)



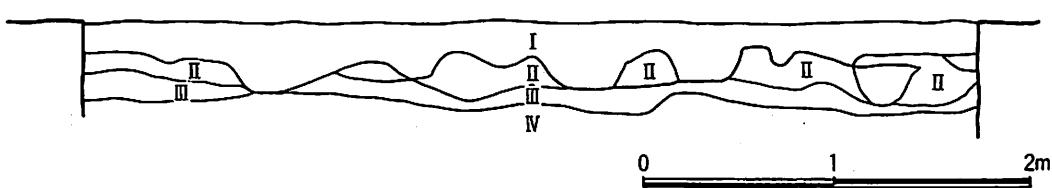
上図、グリッド位置図

下図、層序図

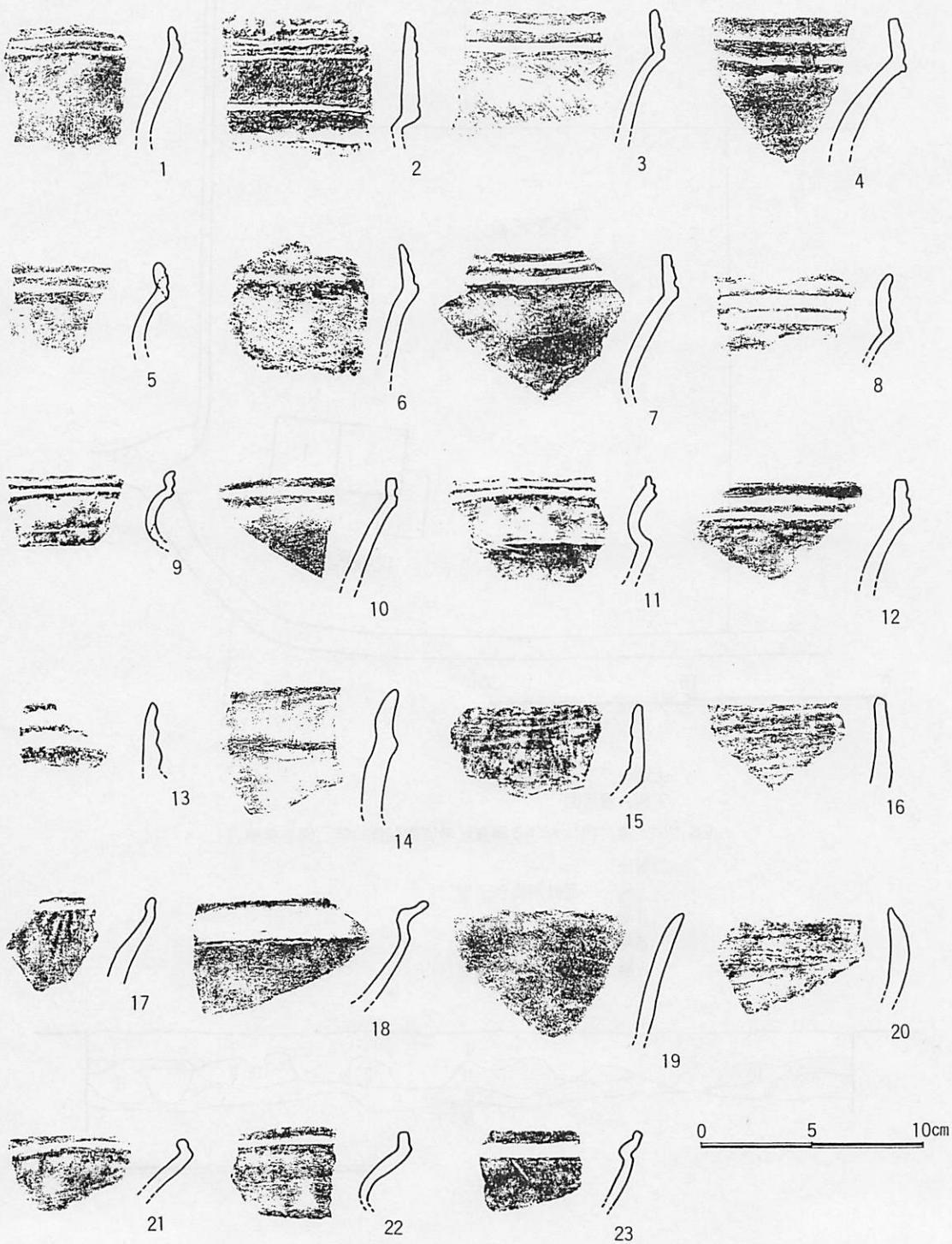
〔※古閑原遺跡内における調査区の位置関係は第□図を参照。〕

◎層序

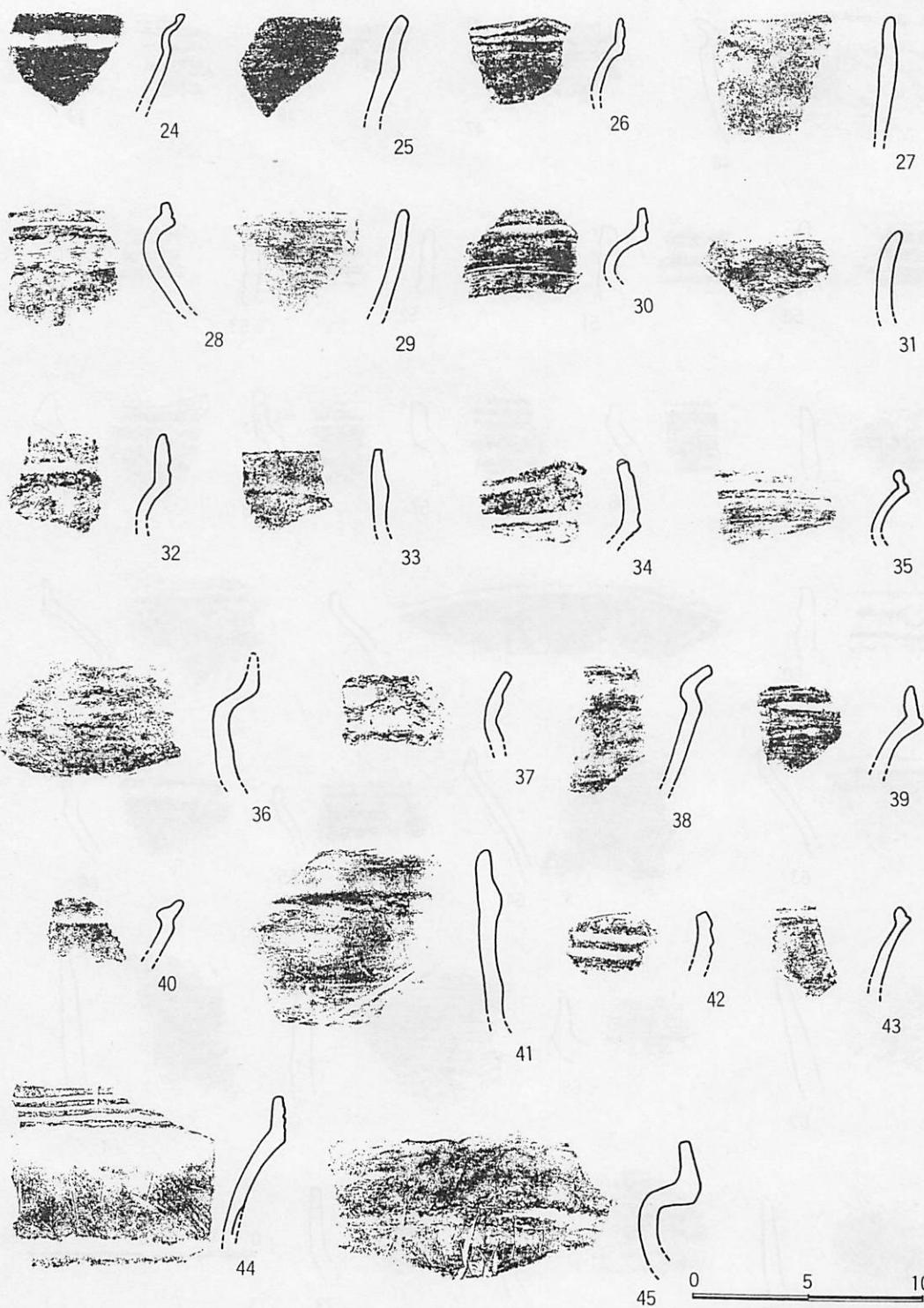
- I層……混砂黒褐色土層
- II層……暗褐色土層
- III層……褐色土層
- IV層……粘質茶褐色土層(ローム)



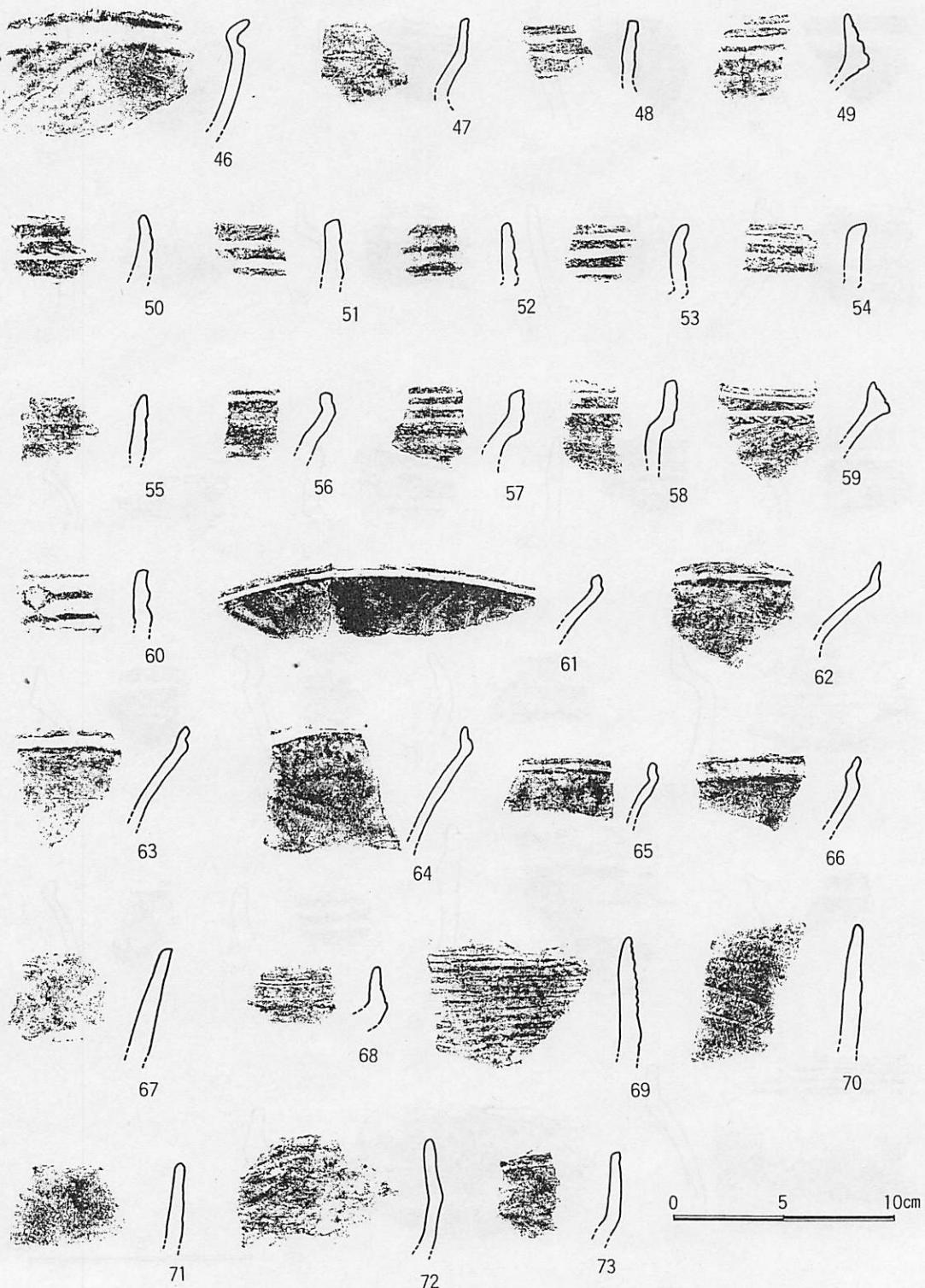
(第3図 古閑原遺跡2区)



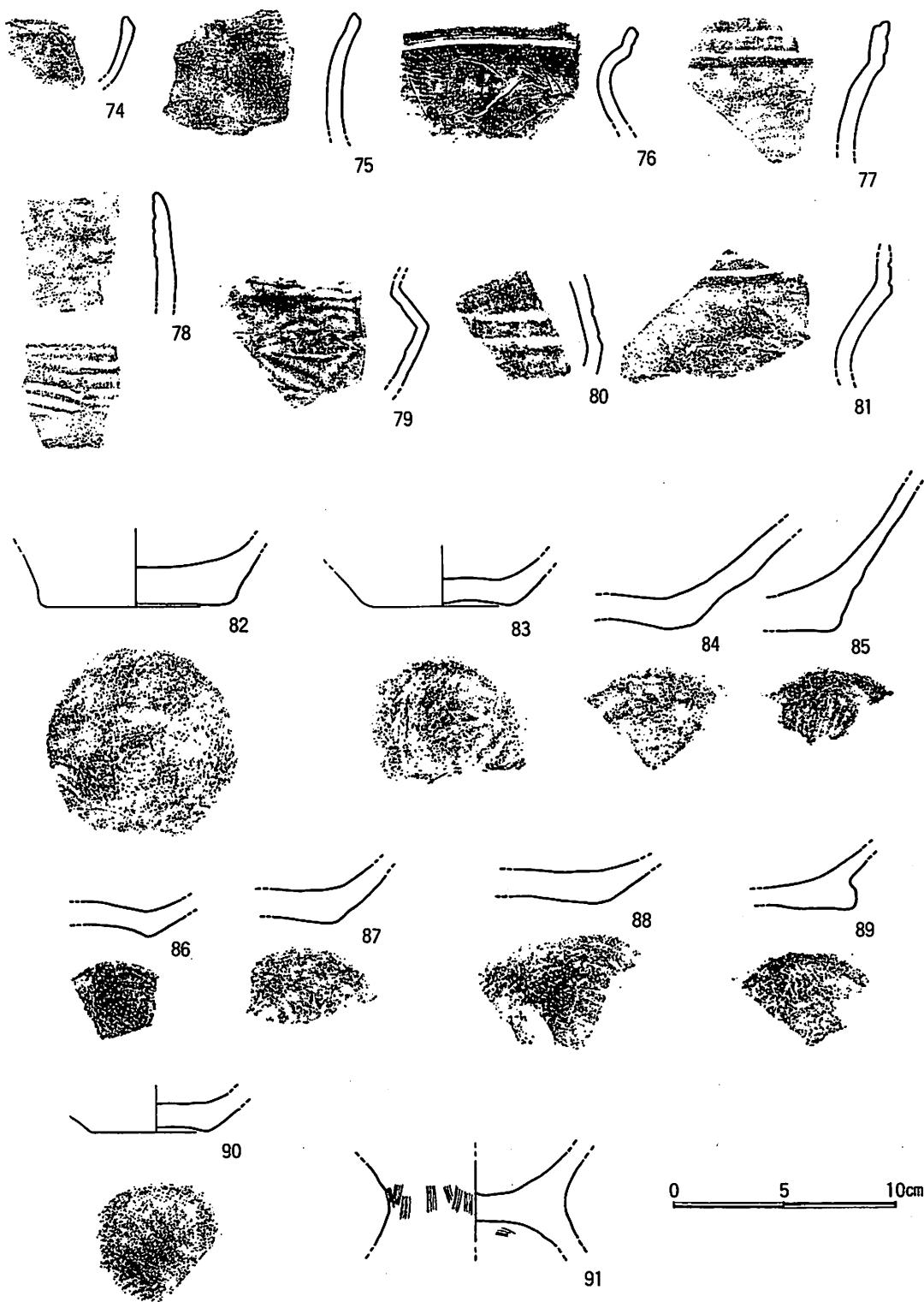
(第4図 古閑原遺跡2区出土遺物)



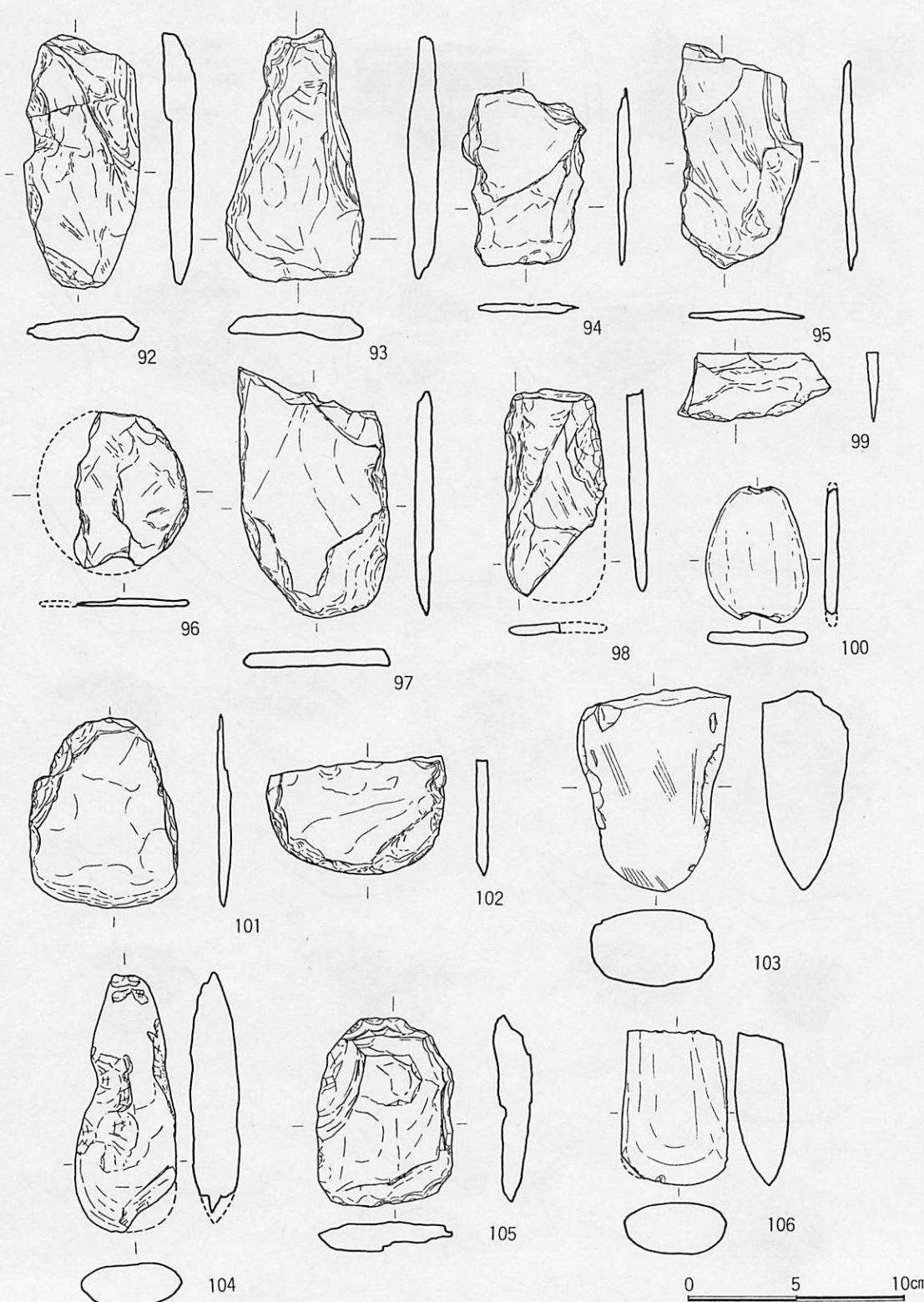
(第5図 古闕原遺跡2区出土遺物)



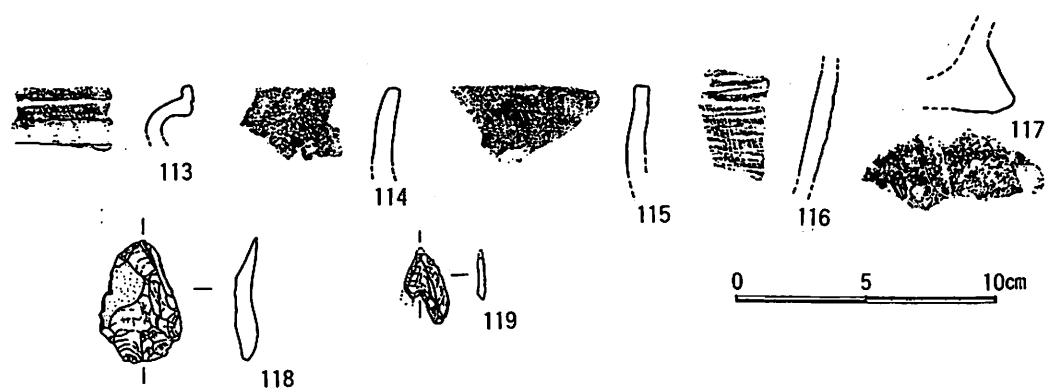
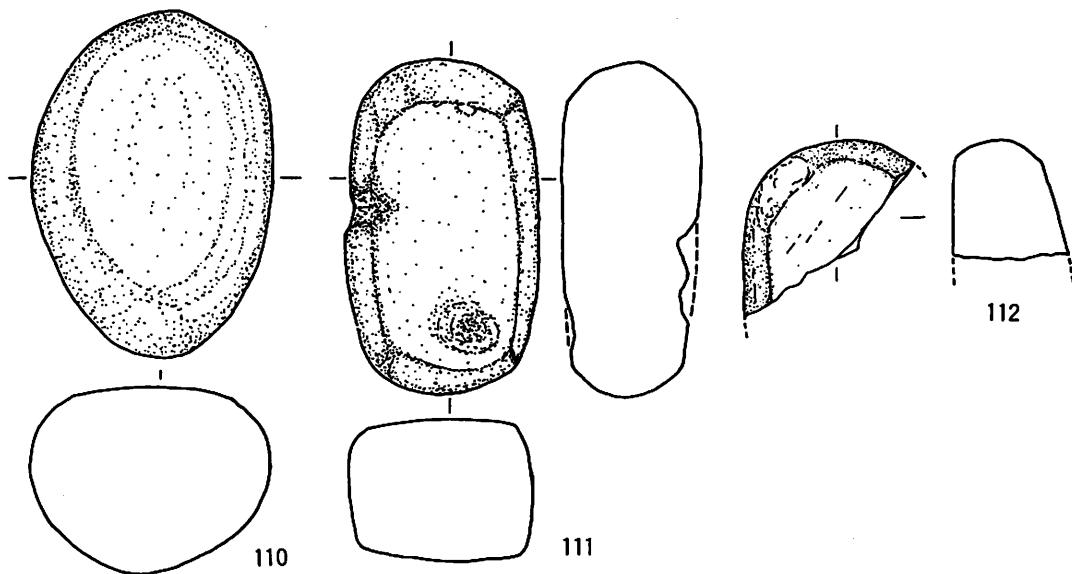
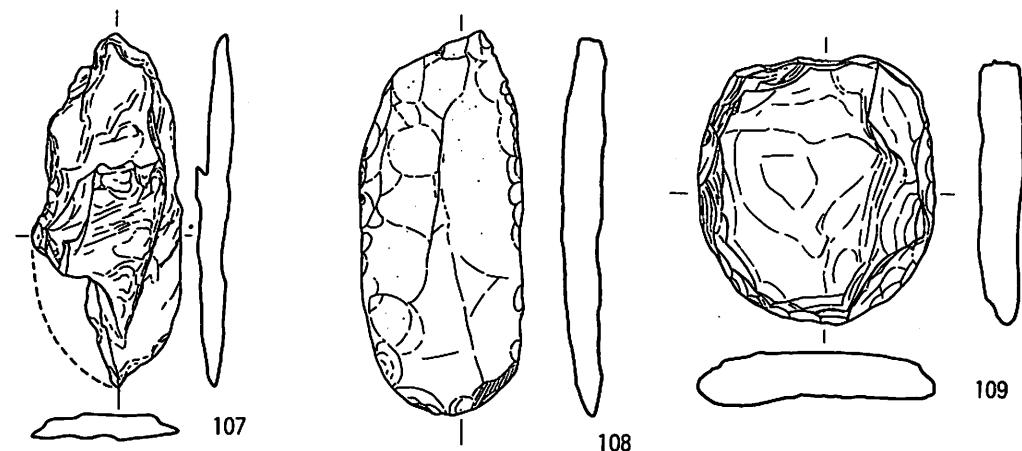
(第6図 古閑原遺跡2区出土遺物)



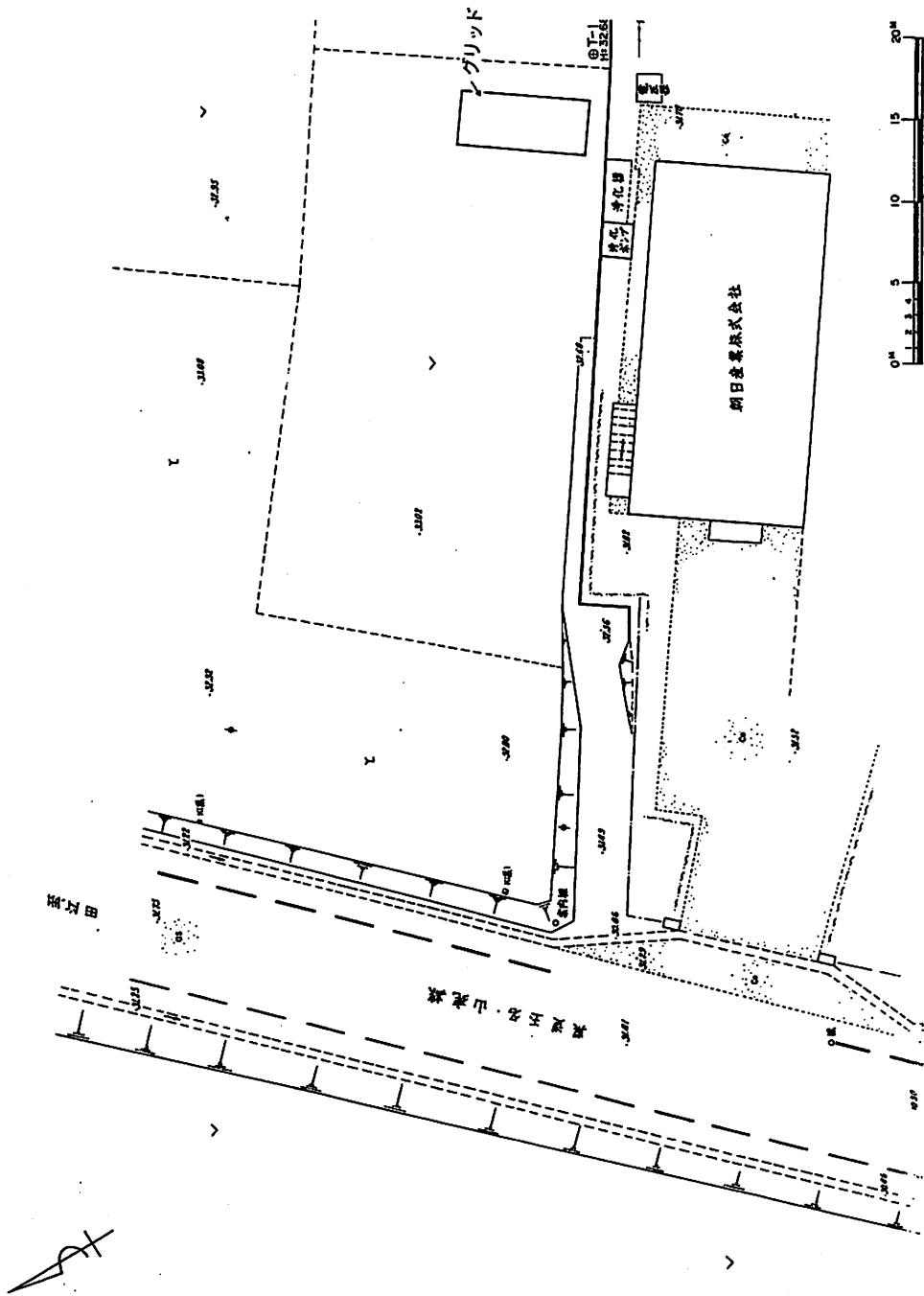
(第7図 古閑原遺跡2区出土遺物)



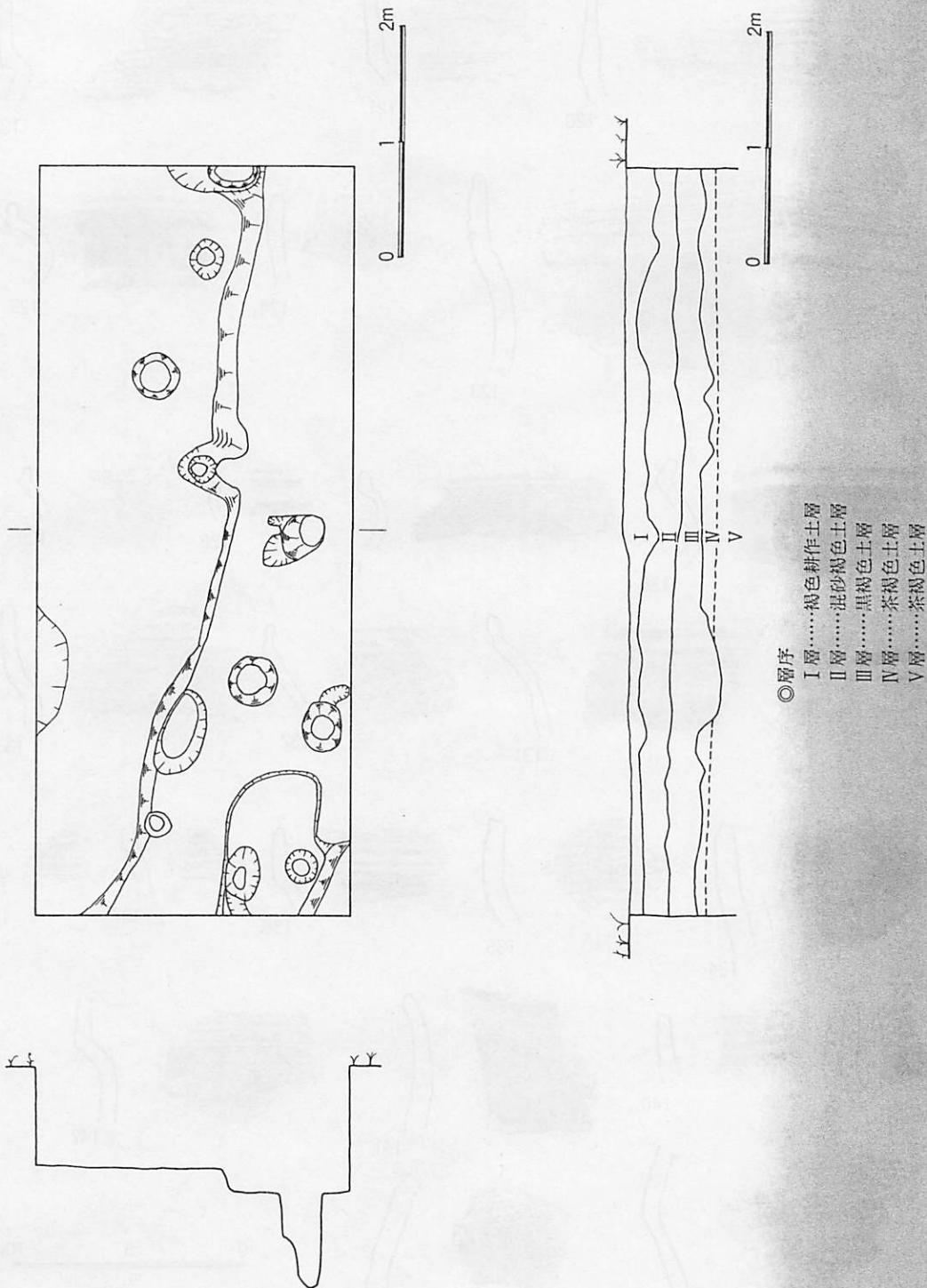
(第8図 古閑原遺跡2区出土遺物)



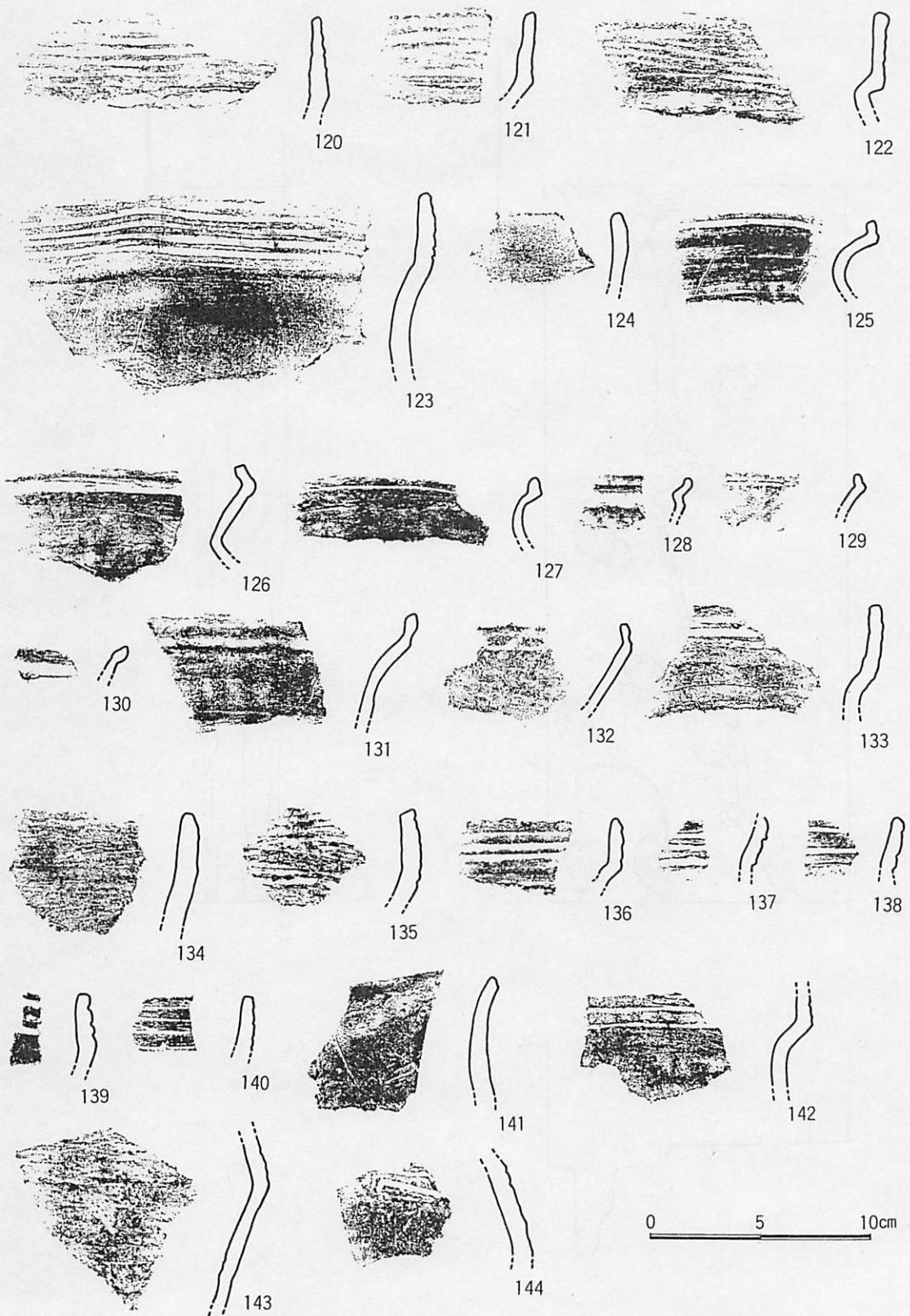
(第9図 古閑原遺跡2区、1区出土遺物)



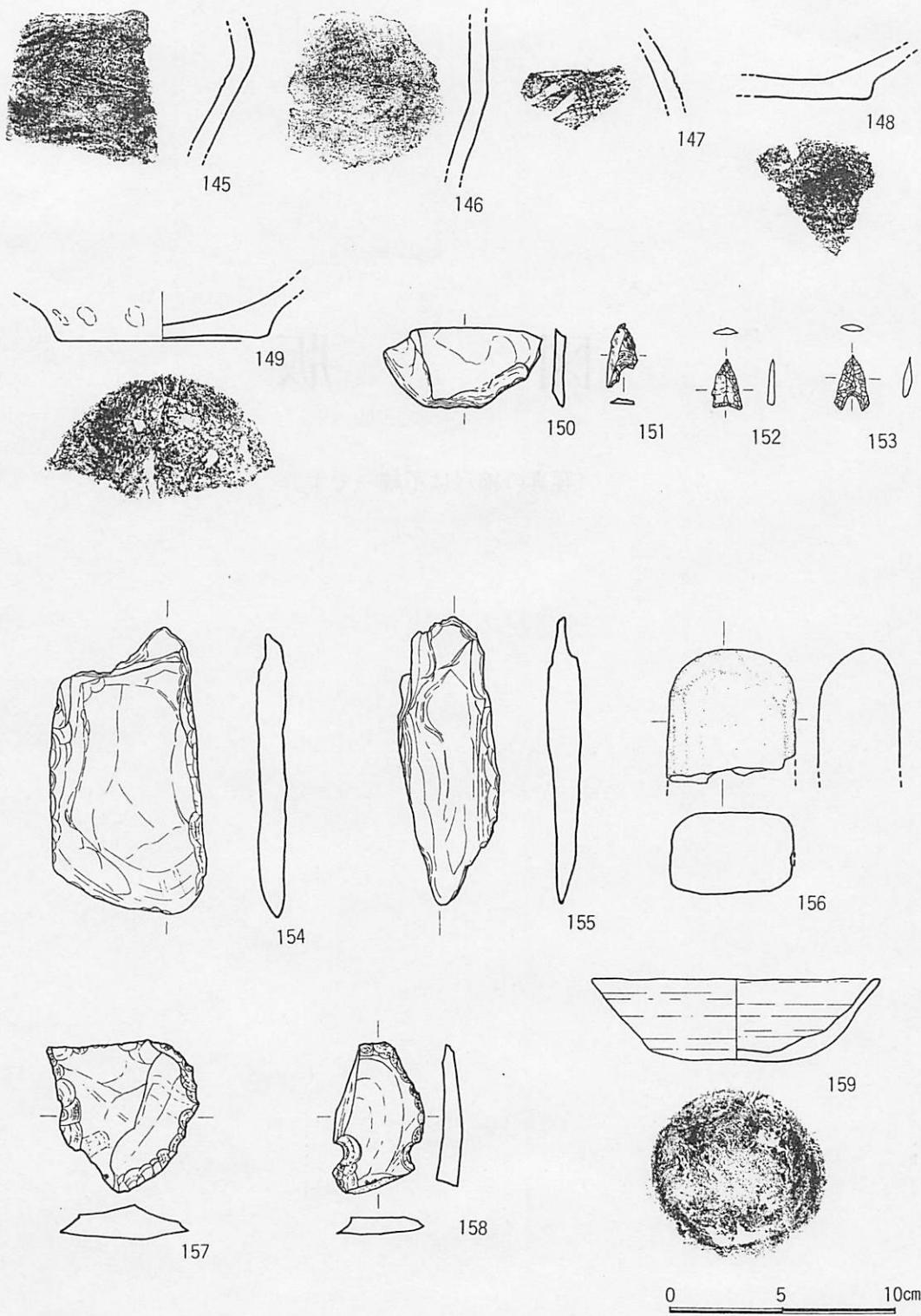
(第10図 松坂原閥連調査区)



(第11図 松坂原関連調査区出土遺構図(上), 層序図(下))



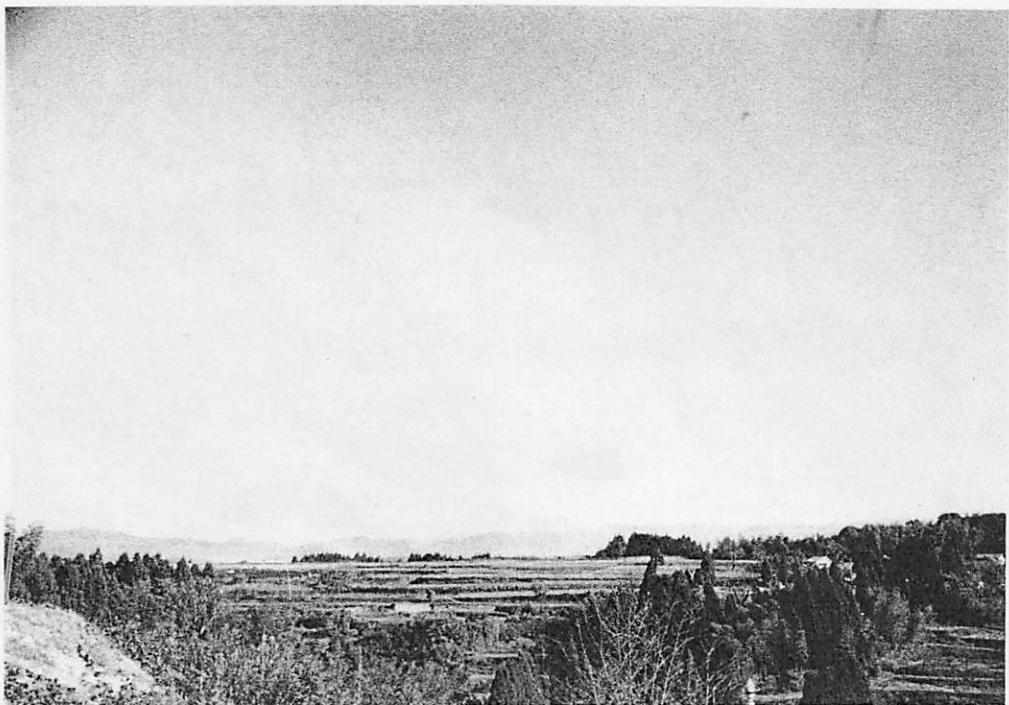
(第12図 松坂原連闘調査地区出土遺物)



(第13図 松坂原関連調査地区出土遺物)

図 版

(写真の縮尺は不統一です。)



図版1 古閑原台地遠景

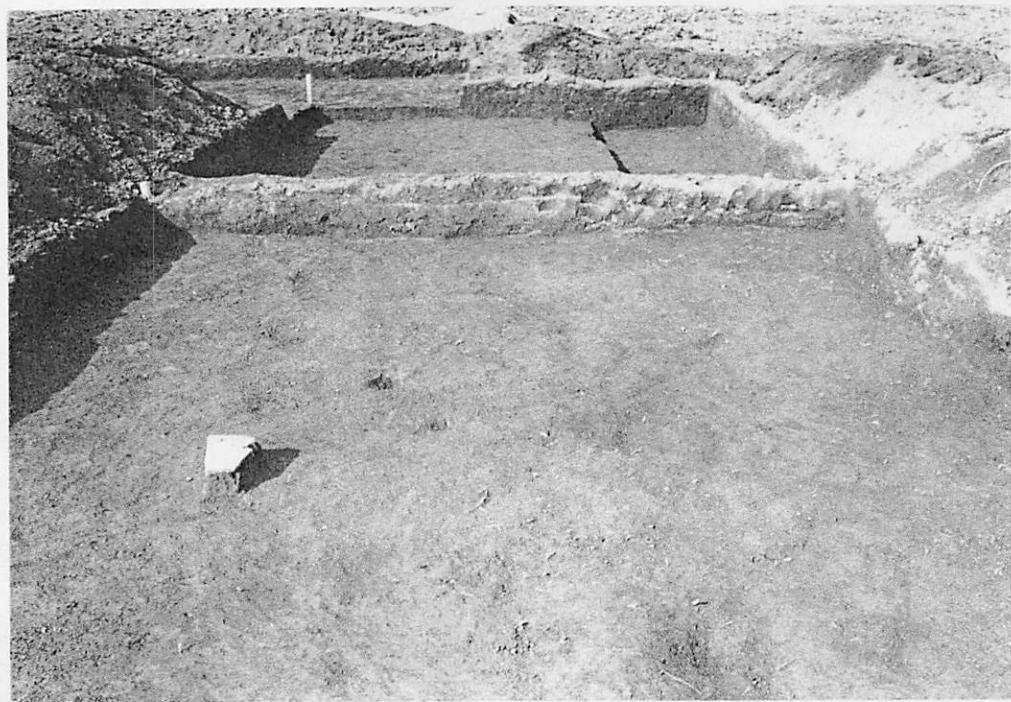


↑ 1区層序写真

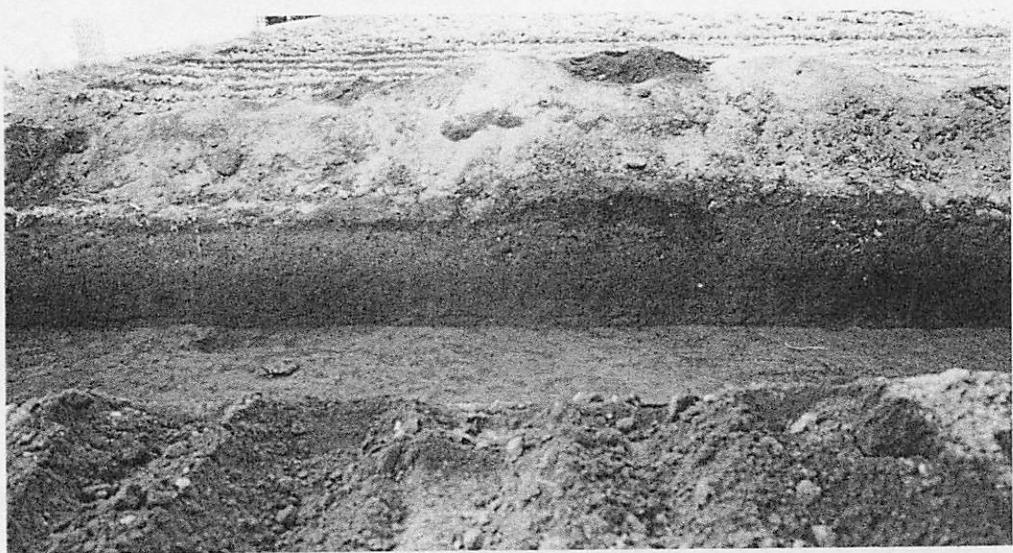


← 1区ピット群写真

図版2 古閑原遺跡1区



図版3 古閑原遺跡2区(上・層序, 下・グリッド開掘状況)

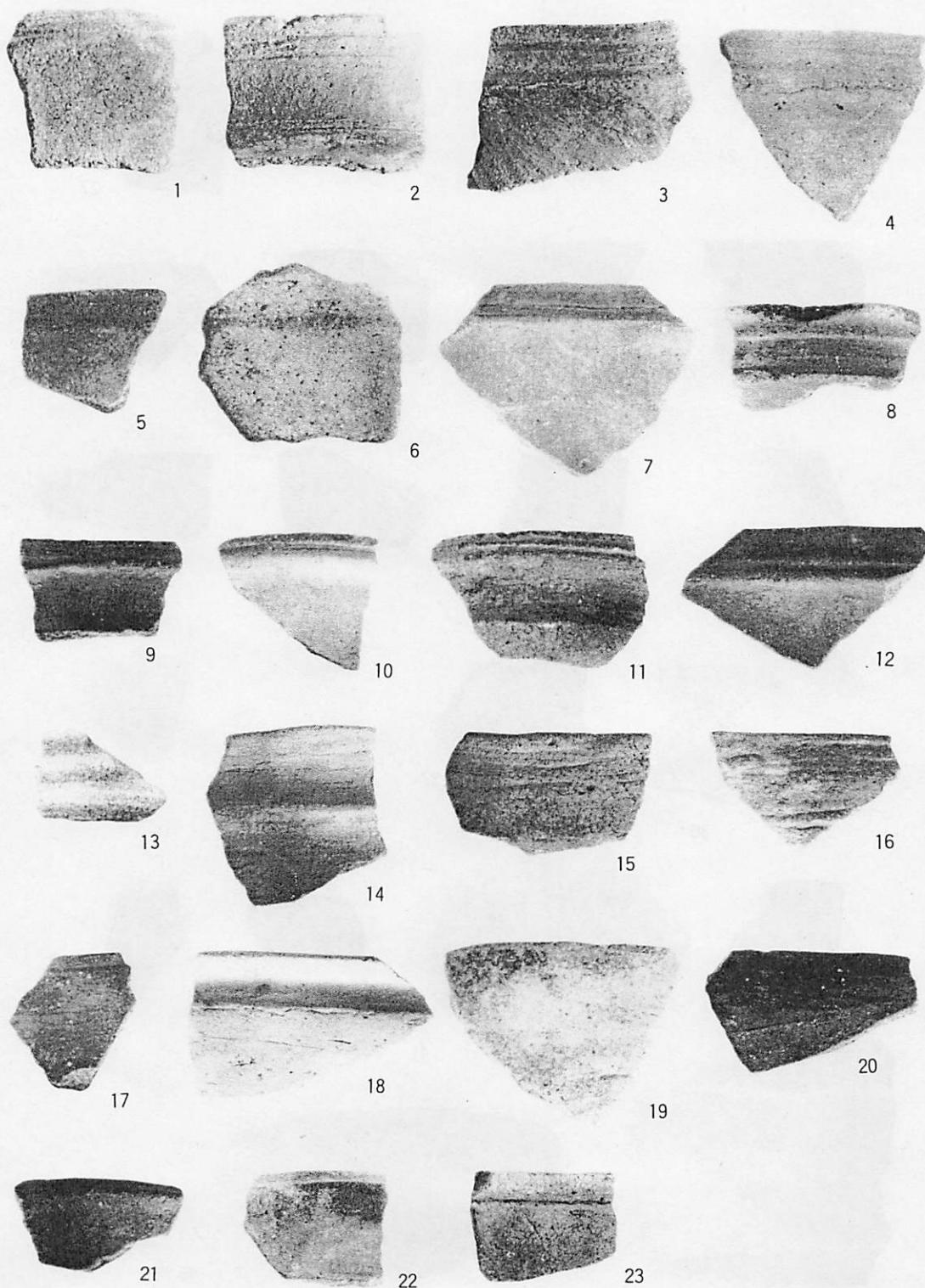


↑ 土層断面写真

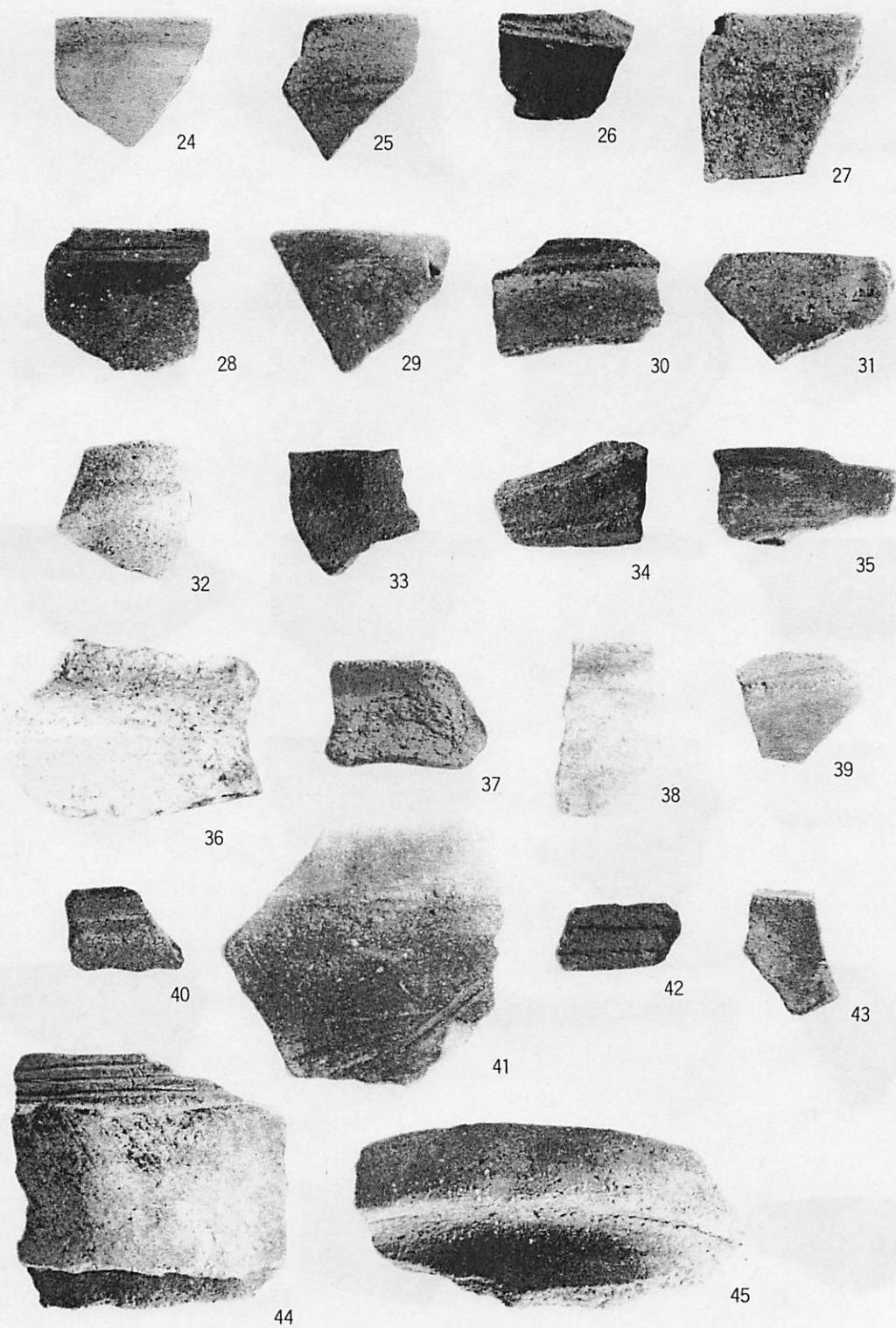


← 検出遺構写真

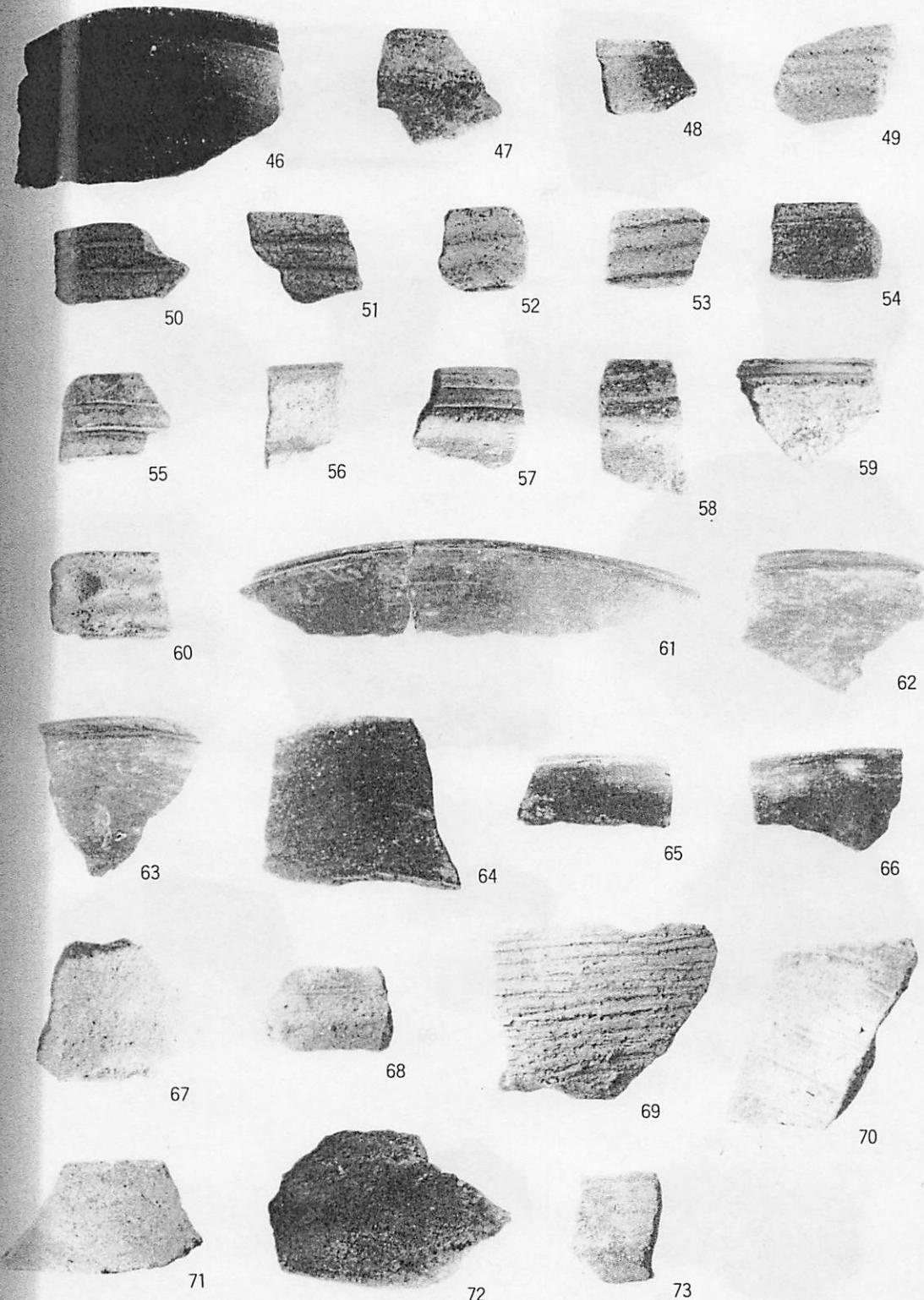
図版 4 松坂原関連調査地区



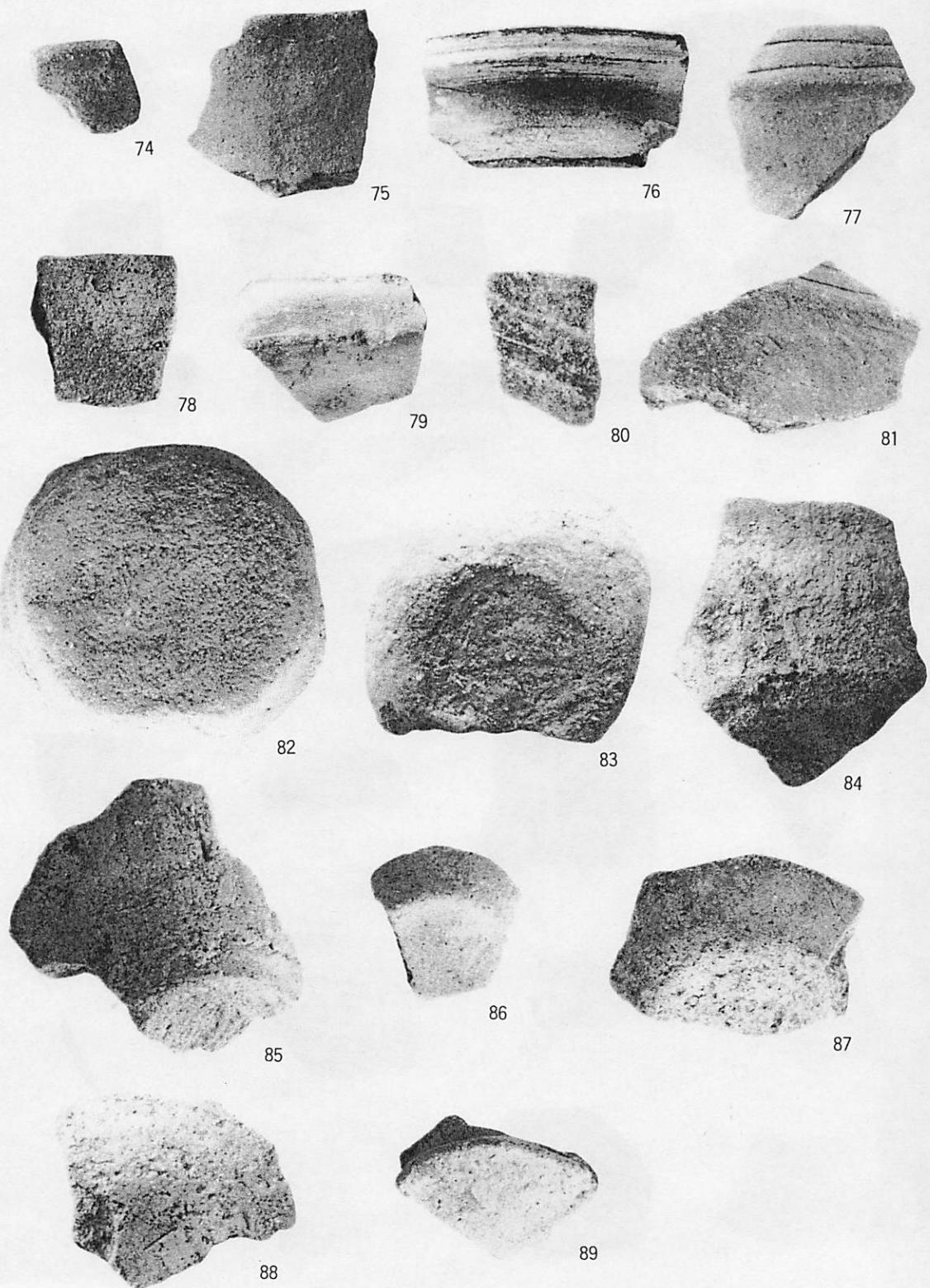
図版5 古閑原遺跡2区出土土器



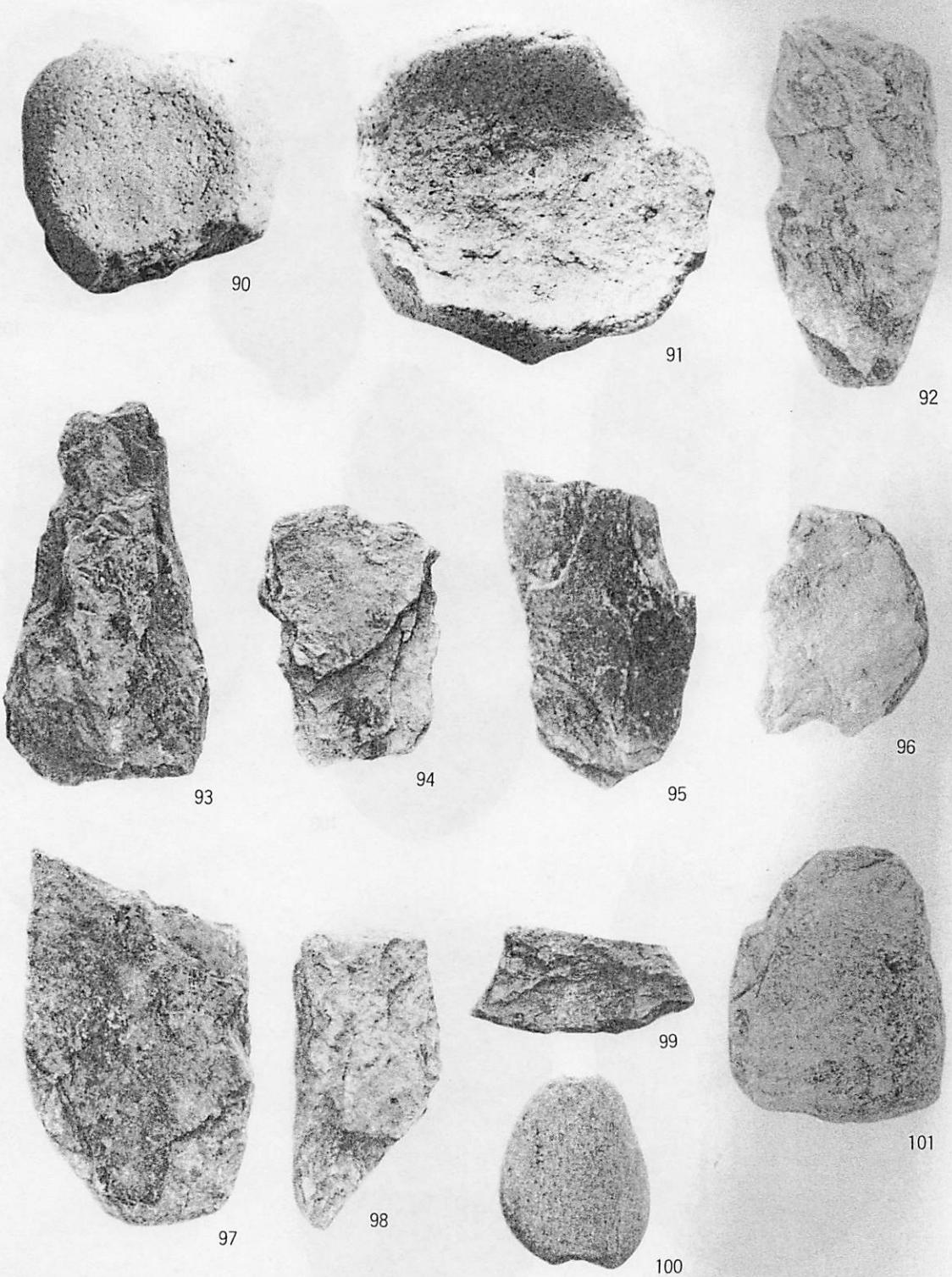
図版 6 古閑原遺跡 2 区出土土器



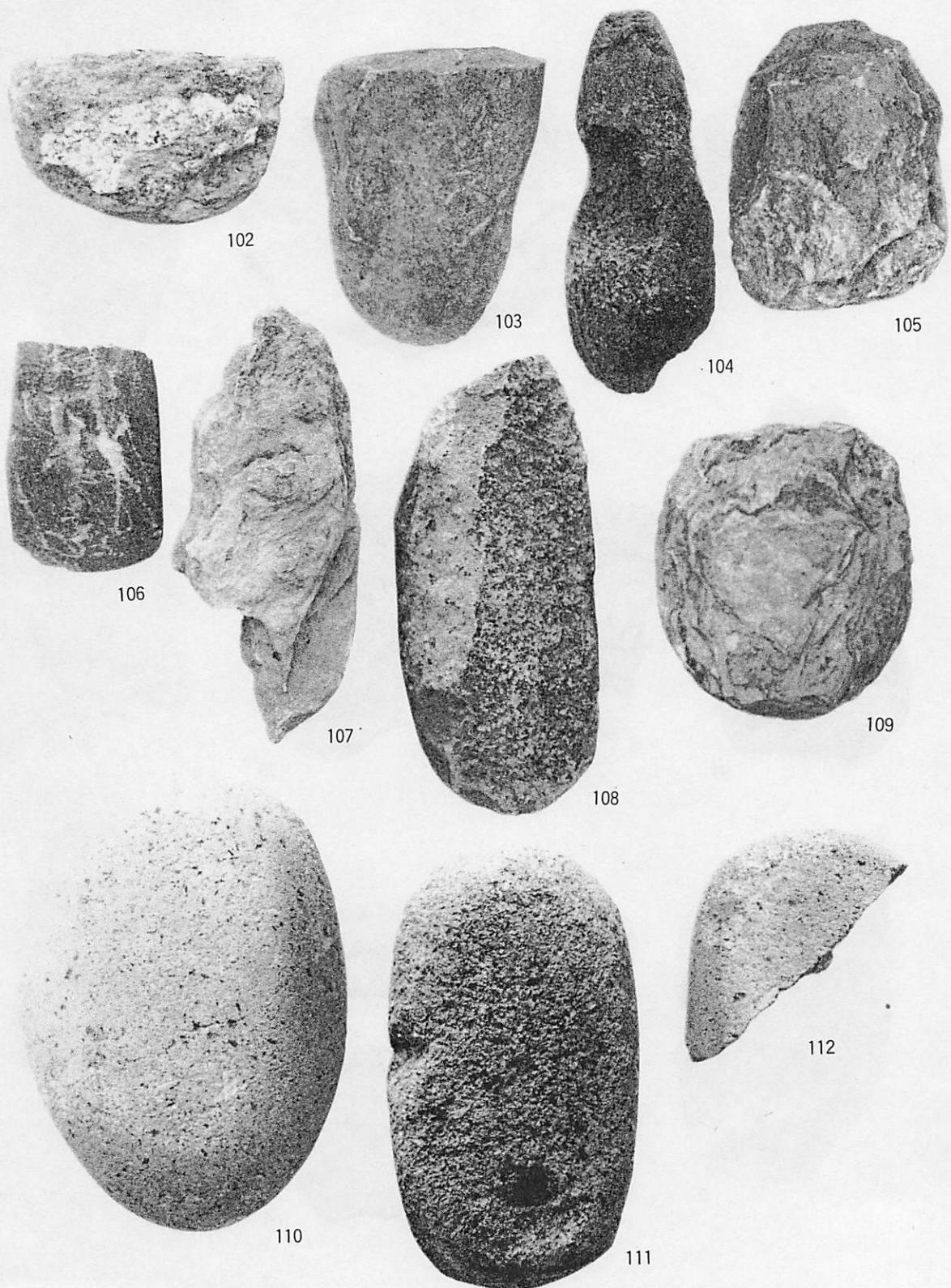
図版 7 古閑原遺跡 2 区出土土器



図版 8 古閑原遺跡 2 区出土土器



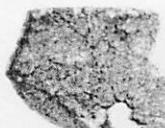
図版9 古閑原遺跡2区出土土器(9~91), 出土石器



図版10 古閑原遺跡2区出土石器



113



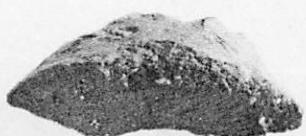
114



115



116



117



118



119



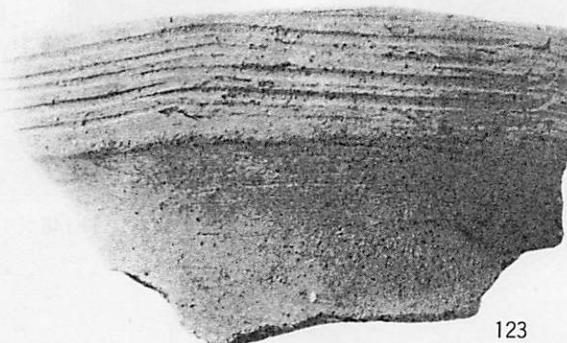
120



121



122



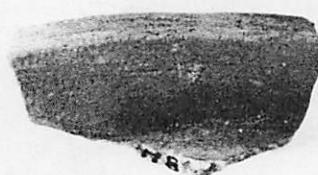
123



124



125



126



127

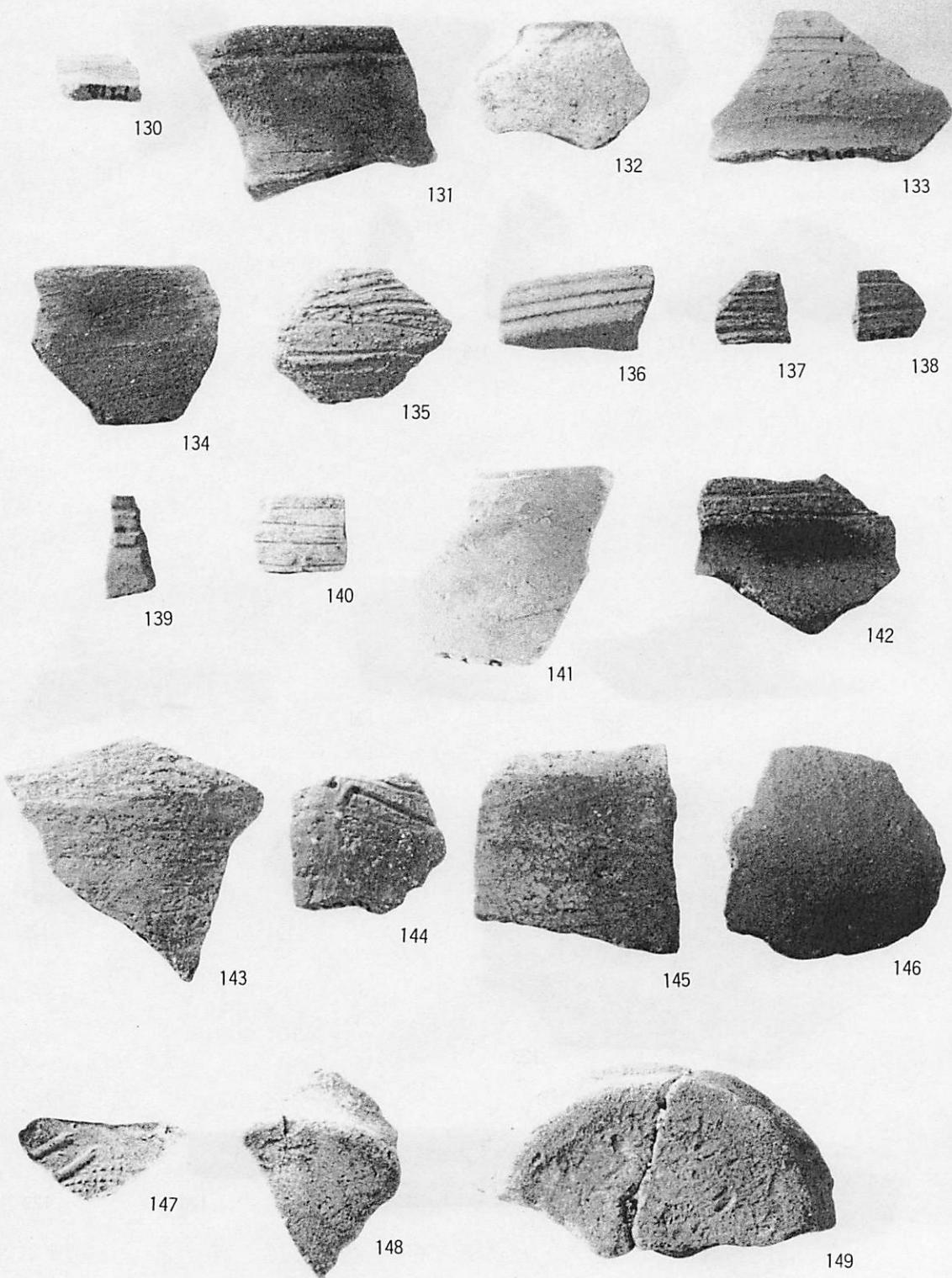


128

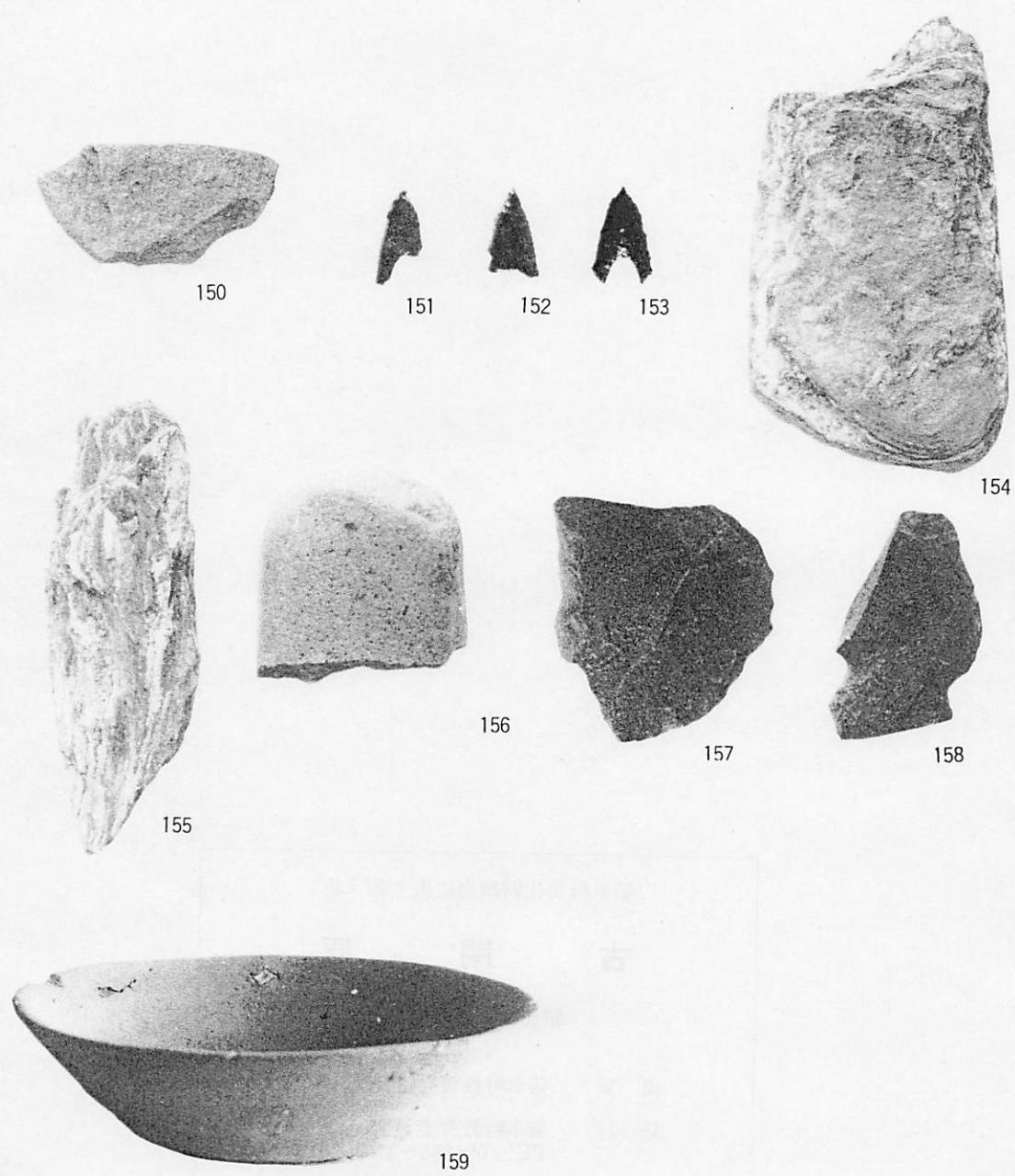


129

図版11 古閑原遺跡1区出土遺物113~119、松坂原地区出土遺物120~129



図版12 松坂原地区出土土器



図版13 松坂原地区出土石器150～158, 須恵器159

菊水町文化財調査報告 第7集

古 閑 原

昭和60年3月31日

編 集 菊水町教育委員会 文 化 課

発 行 菊水町教育委員会
TEL. 096886-3131・3132

印 刷 城 北 印 刷